
魔砲戦記リリカルなのはWS t r i k e r S

アナザー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔砲戦記リリカルなのはWStrikers

【Nコード】

N1459J

【作者名】

アナザー

【あらすじ】

世界を平和へと導いた少年たち。

しかし世界は彼らに安泰と休息を与えることはなかった……。

異世界へと送り込まれた彼らが見るものとは一体……。

世界が揺らぐ時、再びガンダムは立ち上がる！

魔法戦記リリカルなのはW^{ダブル}Strikers、始まります……。

消滅（前書き）

初めてこういうものを書くので至らない点などがありましたら
どん指摘してください。
お願いします。

消滅

広大な大地に三体の巨人がいた。

黒い巨人に青い巨人、赤い巨人。

それぞれ特徴的な巨人は何をするでもなくその場に佇んでいた・・・否、停止していた。

巨人はあくまでも金属などの塊であり動かす人間がいなければただの人形と大差はないものだった。

そしてそこから離れた場所にも巨人と同じく特徴的な少年たちがいた。

「今度こそ最後だな、相棒。」

一人の少年が呟くと共に手元にある装置のスイッチを押し込む。

それは巨人の自爆装置であり、それを押すということは巨人を破壊しようということに他ならない。

そう、彼らはこの地で巨人を破壊しに来ていたのだ。

しかし

スイッチを押し込んだというのに巨人は自爆しなかった。

「かぁーっ！最後のいいシーンでこれかよ！俺の見せ場が台無しじゃねえか・・・」

少年たちの一人が目を押さえ天を仰ぐ。

「ま、まあまあ・・・まだ自爆装置は僕達のもありますから・・・それでいいじゃないですか。」

違う少年が嘆く少年を慰めながら自爆装置を取り出す。

「だけどよお・・・あれはないだろ・・・」

見せ場をぶち壊された少年は落ち込んだ様子を見せながら慰めてくれた少年に手を振り自爆装置を押すよう促す。

慰めた少年は苦笑いをしながら自分の手に握られたスイッチを押し込む・・・

しかしやはりこちらでも何の反応も見せなかった。

何度も何度も押し込んでみるがやはり反応はなかった。

先に自爆装置を押した二人は落胆し、ゆっくりと三人目の少年を見かけ・・・止めた。

少年の手を見たところで思わず揃って日本人の伝説的最終奥義、DOG E Z Aスタイルを取りうなだれてしまった。
ようするにOTLのようになっていた。

何故ならば・・・彼の手のひらにある自爆装置は高速で連打するかのようにつながって押されていたからだ。

「三体揃ってポンコツってか？笑えないぜ・・・仕方ない直接爆破するしかないか・・・」

そう言って最初の少年はトボトボと巨人に近寄っていく。

それを追うようにして残りの二人も後を追いかけて巨人の足元に辿り着く。

巨人の中に設けられたコクピットに乗り込み爆薬をセットしようとした時、突然巨人の目が輝き勝手にコクピットカバーが閉じられてしまった。

ついでに自爆装置も起動したらしくカウントが始まっていた。

「おいおいおいおい！笑えない冗談にも程があるぜ！！脱出は・・・
・間に合わねえ！クッソオーっ！！」

一人の少年が悔しそうに叫ぶ。

その瞬間世界から少年たちは消え失せた。

これが新しい事件の始まりである。

消滅（後書き）

改善案や登場して欲しいキャラなどがありましたらお教え下さい。

ファーストコンタクト（前書き）

取り敢えずしばらくはおさががメインで登場するかと。
あゝデバイスどうするかな。

ファーストコンタクト

「ちつくしょーっ！なんで俺がこんなことにならなきゃならないんだよーっ！！」

カプセル状の機械に四方を囲まれ逃げ場を無くした少年が誰もいない空に向かって吠えながら器用に機械から撃たれる光弾などといった攻撃兵器から身を低くしたり転がったり、時にはカプセル状の機械を盾にしたりしていた。

そもそも彼がこんなことになったのは彼の大きなポケットに突っ込まれている手のひらサイズの金属で作られているであろう装置のせいである。

ではまず、少しばかり時を遡ってみよう。

約30分程前に彼は機体の爆発に巻き込まれ死亡・・・するはずが死亡せず機体から放り出され瓦礫の下に埋もれていた。

最初は瓦礫の中から茶色いおさげだけが何故かはみ出ていたのだがそこから自力で脱出することに成功していた。

もし仮に誰かが真上を通っていたら瓦礫が崩れ埋もれていた彼はあえなく圧死していただろう。

だが彼の悪運が働いたのか誰も現れることもなく無事にかくも死の運命から脱けだすことに成功したのだった。

それが約20分前の出来事でありそれから更に10分程は辺りの探索とポケットに入れた覚えの無い金属の装置を調べていた。

調べてみたはいいものの全く正体は分からずため息をつき途方に暮れていたところであの機械共に襲われ、今に至るのだ。

「相も変わらず女神様は俺を嫌ってやがるな！？というかコレは流石に無いだろ、神様に女神様よー！！」

おさげの少年はひたすら回避する。

「まったく、ついてないついてないとは思ってはいたがまさかこれほどついてないなんて思わなかったな・・・おかげで人生の半分は消費した気がするぜ。あ・・・っ」

ボヤク少年と獲物を狩ろうと攻撃し続ける機械、延々と続くかと思われたやりとりは女神様の邪悪な微笑みで唐突に終わりを告げた。絶えず動き続けた少年の足が限界を迎えたのだ。

いくら少年が訓練をしていたとしても常に全力で動いていれば限界などあつと言う間にきてしまうのだ。

「くそっ・・・俺もついに年貢の納め時か？」

苦悶の表情を浮かべながら必死に活路を探す、だがどれもこれも一人で・・・しかも体力も残っており人員が最低でももう一人必要なものばかりで今の自分には無理なものしかないことに気づき、少年はとうとう膝を折り地面に倒れ伏してしまった。

『へっ・・・今思えばろくでもない人生だったな。でも悪くはなかった・・・ま、先に地獄で待ってるぜ？』

少年が諦め機械共の光弾が撃たれるというまさにその瞬間、運命の歯車は回り出していた。

「こちらスターズ01、現場上空に到着！なお、現場に黒い服を着た子がガジェットに襲われてます！」
まだどこか幼さの残る声が輸送機の中に響く。

「なんやて！？急いで出」スターズ01、高町なのは・・・行きます
！・・・撃したな・・・」

高町なのはという少女と通信をしていた独特のイントネーションのある話し方をする少女は一瞬目眩を起こし、倒れそうになるがそれを意地で耐えたため息をつく。

「さっすが・・・常に全力全壊のエース・オブ・エースやな・・・出撃と言いつける前に行きよったよ、あの娘・・・」

目からアニメさながら、滝のような涙を流し軽くへこんでいた。周りのスタッフ達もそれにつられたわけではないが自然と苦笑しながら揃って思っていた。

『だって・・・あれが、なのはさんだもんなあ・・・』と。

一方、おさげの少年はというと・・・

「デイベイイン、バスターっ！！」

空に一筋の桃色の光線が撃たれ、その軌道上にあるものを次々と破壊していく様子が鳩が豆鉄砲を食らったかの表情を浮かべ啞然としていた。

無理もないことだ。

諦めて覚悟を決めた途端に二三体が突然ライフルから撃たれる熱線によくにた光に撃たれ爆発四散したばかりか、それを撃ったのが人間の少女であり、なおかつ空まで飛んでいたのでは啞然としないわけがないのだ。

そうして少年が啞然としていることなど知らずに少女が最後の一機を破壊し周囲にガジェット反応が無いことを確認し少年の下に向かう。

「大丈夫だった？ごめんね？もうガジェットもないし取り敢えず安心していいよ。」

少女が微笑みながら近寄るが少年は驚愕の表情を顔に貼り付け思わず後退りしていた。

少女は『あ、あれ？』と思いながら歩み寄るがその度に少年は後退り少女は一つの可能性を頭に思い浮かべ、少年に問い掛けた。

「ねえ、魔法があるって信じる？」

そう問い掛けた瞬間少年があからさまに痛い子を見る目で少女を見ていた。

少女はある程度覚悟はしていたものの、いざ見られると少しばかり傷ついてはいたがそこは我慢して笑いかけた。

「にやはは・・わ、私は高町なのは。君を助けにきたの。」

極力笑顔で言おうと頑張るがやはり先程のこともありやや表情が硬いものになってしまい、少し怖い。

「・・・俺はデュオ・・デュオ・マックスウェルだ。」

少年・・デュオは取り敢えず名前を言い立ち上がる。

警戒心を隠そうともしないで自分を観察するデュオになのはは少し苦笑いをしてしまう。

「なあ・・・あれは一体何だったんだ？ついでにここは何処なんだ？」

デュオは取り敢えず疑問を一つずつ消していくために質問する。なのはは真剣な表情をして説明しようとするがそれは彼女の上司によって阻まれた。

「あー・・・なのはちゃんとおさげの君、取り敢えず六課にきて貰えるか？そこにおつたらまた襲われてしまうかもしれないやろ？」

確かに今しがた襲われた場所に長い時間留まるのは得策ではなかった。

デュオは渋々なのはに指示を仰ぐ。

なのははそれに頷きデュオを輸送機へ案内し先程の質問に答えることにした。

「さっきの質問だけど、あの機械はガジェットっていう自律行動のできるロボットみたいなものだよ。あとここはミッドチルダっていうんだけど・・・聞いたことないでしょ？」

なのはは簡単に答えデュオもその答えを受け入れていた。

何せ自分の世界にはあそこまで小型なMDは存在しないしMDならばプラネットディフェンサーを搭載していてもおかしくはない。

更に言えば基本的に造形が違うのだ。

だいたいMSの前ではあの様な小型機では無力に等しいのだ。それ故にデュオは先程の答えを受け入れることが出来たのだ。

それからも二三質問をし基本的なことを頭につめこんでおく。恐らく明日起きた時には大半を忘れていそうだが今はそれで十分だ

とデュオは思う。

そして直感的に気づいていた。

これから自分が再び戦火の渦に巻き込まれ平和のために戦わなければいけないことを・・・。

二人を乗せた輸送機は機動六課本部へと向かい飛行していく。

そしてそれを一人の男が見ていた。

まるで観察するかのような眼差しで見っていた男はその場から忽然と消え後に残ったのはガジェットの成れの果てである鉄くずだけだった。

ファーストコンタクト（後書き）

取り敢えず次はギャグでも入れてみようか・・・

再会？奇跡の出会い（前書き）

たった3日でアクセス1200超えた・・・何か凄く嬉しいです。

お気に入り10件とか・・・なんかもう・・・感無量って感じかも・・・。

では第三話、どうぞ。

再会？奇跡の出会い

『・・・オ・ん・・・ユ・くん・・・』

んゝ・・・五月蠅いな、静かにしてくれ。

『も・・・きな・・・仕方・・・い・・・』

ギューツ

「イデデデデッ！！なにしゃがるヒイ・・・ロ・・・？」

目が覚めるとそこには頬を膨らませ子供のようにプンスカ怒るえらく見た目麗しい少女という名の悪魔がいた。

「何か言った？」

「イイエ？ナンニモ？」

俺は知っている、この少女に逆らえばどうなるかを。

確か名前は・・・高町なのはとかいう東アジアの民族、日本人のよ
うな名前の奴だっけ・・・

そもそもなんで怒ってるんだか・・・

デュオは欠伸をして軽く伸び椅子から立ち上がり簡単なストレッチを始める。

「んゝ、よく寝たなゝ。」

本人は物凄く呑気に言っているが背には冷や汗が大量に流れていた。
何故かといえば簡単なことだ。

背中を見せるデュオに複数の殺意の込められたら視線が向けられて
いるからだ。

そう、その場にいる人間全員（デュオ覗く）はデュオに対して激怒しているのだ。

特に茶髪でショート女性の背後には仁王が見えるほどだ。

そもそもなぜ彼女らが何故怒っているのかというと、実に簡単なことであるがまず場所、そして話していた内容、そして説明相手の状態が不服であるからである。

「あゝ・・・ははは、まあ許せ」

デュオは彼女らの怒りの理由をなんとなく悟ったらしく笑顔で謝るが長い髪をサイドアップに纏め上げている少女、高町なのはが冷めた視線を向けていた。

「えっと・・・なのは？どうかした・・・か？」

冷や汗を流し少しずつ後退りしているとなのはが呟いた。

「デュオくん、ちょっと頭冷やそうか？」

魔王の雰囲気と眼を頭わにしたなのはにデュオは思わず腰が抜けそうになってしまった。

「お、落ち着けなのは！いや、なのはさん！頼むからその目だけは止めてくれっ！」

デュオは心底焦っていた。

何せあの目を輸送機の中で偶然見てしまったのだ。

まあそれもデュオが悪かったのだが・・・

だがそれはまた別の話で話そう。

「んゝ、なのはちゃん許したったらどうや？デュオくんも悪気があったわけないやろっし。」

茶髪の前でショートヘアの少女、八神はやてがなのはを諭す。
するとなのはは渋々了承しいつもの表情に戻りデュオを軽く睨みつけ始めた。

どうやら真面目な彼女にはああいった行動は許し難いようだ。

そんな状態のままデュオへの様々な説明が行われていった。

はつきり言ってデュオは終盤に近づくにつれて『神様は俺のことを心底嫌いみたいだな』と感じなけばヤケクソになっていた。

彼がイライラしながら説明を聞いていると、不意に気になる説明が始まった。

それはポケットに入れていた金属の塊のことだったのだが、どうやらデバイスらしい。

機能の説明などはなかったのだが彼は解析出来なかったんだろうな
くなどという適当な当たりをつけ事故解決した。

それにポケットから出してよくよく見てみるとそれは何処かで見た記憶がある。

『はてさて・・・何処だったかな・・・』

デュオが突然唸り首を傾げたことにより説明を中断し、その場にいた全員が彼をじっと見つめた。

十秒ほど唸ったところで彼は手をポンと叩く。

「ど、どうしたんや？何か分かったんかあ？」

全員を代表してはやてが訊ねる。

「ん？ああ、今更なんだがこの塊なんだがそういや自爆装置だったなあゝって思い出したんだよ。」

デュオは笑いながら言うが彼女らはそれを聞いた瞬間目を見開き一斉に外へ逃げ出しドアの隙間からこっそり覗くようにして様子を窺い始めた。

かなり過剰反応な気がするが仕方ない反応と言えなくもない。
普通、自爆装置と聞いてそれ単体のみがあつた場合それ自体が爆弾である恐れがあり、身構えるのは当然の行為だからだ。

「大丈夫だつて、もう爆発させる対象が無いコイツはただの金属の塊だ。」

苦笑いしながらスイッチを押し込み何の反応も起こらないことをなのは達に見せると彼女らは安心したのかゾロゾロと中へ戻りだし再び席に着く。

現金なものであると思いつつ肩を竦め、口を開く。

「だいたいこんなもんを軽々しく任務了解『アクセスコード認識、起動します』だ・・なんだ？」

ヒロの真似をして任務了解と言うと同時に自爆装置のスイッチを押し込んだ瞬間、自爆装置から女性の声が発せられ淡く光り出す。それに驚いたデュオは誤って落としてしまつが自爆装置は地面に落ちることはなく、宙に浮かんでいた。

みんながその光景に口を開け啞然とするなか、一人の少女だけは違つた。

「今のは…まさか…」

少女は知らず知らずのうちに身を乗り出していた。

そしてその手で光を纏つた装置に触れようとした途端、見えない力に弾かれ指先を軽く痛めてしまう。

金髪の女性が慌てて手の状態を見て治癒魔法をかけ少女の指先は元の健康な肌色を取り戻すが彼女の瞳に涙が浮かび上がり頬を伝い床に落ちる。

そして…・・雫が落ちたことで発生した音と共に装置が甲高い音を

立て割れ光が人の形に変わっていった。

何人かはその形で何かを想像し一人だけは確信していた。

完全に人の形になった時その姿を知る者の口から最初から感じていた少女と同じ名を呼ぶ。

光が粒子となり宙に弾かれ現れた人物、白銀の長い髪に高い身長、そしてある種の神々しさを漂わせるその者の名を……

「……リン……フォース（さん）」

そう、10年前に主や仲間を生かす為に一人帰れぬ旅に出た闇の書事件の最初で最後の死者であるリンフォースに瓜二つなのだ。違いがあるのは少しばかり幼いことと……その双眸くらいだ。

10年前の彼女はつり目であつたが今目の前にいる彼女は柔らかく優しそうな目つきであり、さらに瞳の色も真紅ではなく翡翠色となつているためなのは達は同一人物として判断していいのか悩んでしまった。

「あー……不躰で悪いんだけどよ、アンタ名前は？」

彼女らの反応があまりにまどろっこしかったらしく、デュオが話を切り出す。

「私の名前？私は0、ゼロと言います。」

リンフォース改めゼロが微笑みながら答える。

その綺麗な笑顔にその場の人間は思わずドキッとしてしまった。

後に彼女の微笑みは女神の微笑みなどと呼ばれるということは今はまだ誰もが知りようのないことだった。

場所は移り変わり聖皇教会・・・ここにはあるレアスキルをもつ人間がいる、名前をカリム・グラシアといい、かなりの美貌の持ち主で教会内ではファンも多い人物である。

そんな彼女に最近、執事が出来た。

出会いは偶然の出来事だが、彼女のスキルで分かってきていることにどうも関係していることが判明し一切の出自を秘匿事項とし自分の近くにおくことを決めた。

最初は次元漂流者ということもあり勤労などもなしで手厚い幫助してやるつもりだったのだが彼に伝えたところ、思い切り拒否されたのだ。

カリムも最初はなんとか押し切り、安全な場所に保護するつもりであつたのだが彼が必死になって手伝わせて欲しいと頼むので自分の身の回りの手伝いをさせることにした。

最初のうちは戸惑い、稀に失敗していたのだが頭が良いのか一週間もたった頃には彼の上司につけたシスター・シャツハと同じくらいになんでもこなすようになっていた。

特に老人たちには彼の人柄もあつてか人気があり、子供たちにもかなり慕われており、たまに子供たちには勉強を、老人たちには居心地のよい場所教えたり体の具合を診てやつたりもしていた。

本当に優秀で賢く、そして温厚な人柄から教会の人間からも数週間で信頼を得ていた。

カリムは知らず知らずのうちに彼を見るたびに笑みが零れるようになり、教会の人間や院内の人間も次第に笑顔が溢れるようになり非常に暖かく居心地のよい場所へと変わっていったのだ。

そう、教会を規律の厳しく笑みも多いとは言えない場所から暖かく居心地のよい笑顔溢れる場所に変えた人間というのがカリムの執事

として働く少年のことなのだ。

カリムは最近思うようになった。

彼の存在はいつか管理局をも変えるのではないかと。

「――、明日はやてがくるの。何時もの頼めるかしら？」

カリムは少年執事に訊ねる。

すると少年は笑いながら「はい、いつもお世話になってるお菓子屋さんのケーキですよ？明日の朝一番に取りに行くことを伝えてきますね？」

少年はカリムに聞き返すとカリムは微笑みながら首を縦に振る。

少年は明日、奇跡と出会うことを今はまだ知らない。

そして同時に少年を含めた全ての人間が強大な敵の魔の手が忍び寄る音に気付くのはまだまだ先となることだろう。

二人と一騎の人間を除いて・・・

再会？奇跡の出会い（後書き）

デュオ「ったく、なんか俺ばかり酷いめにあってないか？」

フェイト「き、気のせいじゃないかな？というかまだ出番があるからいいじゃないか・・・私なんてまだ少女たちとしてしか登場してないんだよ？」

デュオ「諦めろ、この作者からしたらフェイトの出番はまだ早いってことなんだろう？」

フェイト「な、なんでかな？」

デュオ「そりゃあ・・・アンタが作者の秘密兵器だからだろ？」

フェイト「ひ、秘密兵器！？」

デュオ「そ、溜めて溜めて溜めて、ここぞという時にドーンと登場させるんだよ！」

フェイト「そ、そうなんだ・・・なんかやる気出てきたかも！」

飛び去るフェイト

デュオ「ふっ、ようやく言ったか・・・なんとか誤魔化せた。」

フェイト?」と、思っていたのか?」

デュオ「!!?」

小劇場 出番がない 完

驚愕の事実（前書き）

今回は残念なほど短いです。

頑張らないと・・・というか気づいたら3000目の前でした・・・。

こりゃもつと頑張らないといけませんね、努力します。

驚愕の事実

「うわぁっ！なんなんだ、コイツっ！？」

周囲を包み込むように炎が燃え盛る。

その場に居るのは白衣を着た男性と同じように白衣に身を包んだ人だったもの、そして・・・

「貴様に知る権利はない・・・そして知る必要もない。」
「エコーの掛かったくぐもった声がする、それを発するのは・・・」

「あ、悪魔め・・・！うぉぉ・・・」

白衣の男性の胸から背に突き抜ける翡翠色の刃、絶命したのを確認し男性から刃を引き抜くその容姿はまさしく悪魔のもの。
悪魔はあたりを見渡し破壊活動を始める。

あたり一面があっという間に焼け野原になり、破壊するものがなくなり撤退しようとした時微かにだが声が聞こえた。

「う・・・っ・・・一体・・・何が・・・」

小さな身体を必死に起こす。

その身体は人間の大きさではなく妖精と言った方が似合うほどの大きさに悪魔もこれには多少驚いたが何食わぬ顔（顔は見えないが・・・）で剣先を向けようとするが軽く移動させて止めていた。
そして妖精を片手で持ち上げ焼け野原を後にする。

ある泉の畔に親子ほどに年の離れた二人がいた。片方は子供で美しい紫色の髪に陶磁器のような肌をもった少女、片方は体格のよい偉丈夫の中年男性と奇妙な組み合わせの二人組みである。

少女のほうで泉の方で水浴びしていたのか濡れている髪を乾かすために丹念にタオルで髪を拭くなか、男性が料理を作る。

そこには小さな家庭的雰囲気があるが彼らは決して親子でも、ましてや家族ですらない。

だが彼らは互いを信頼しているために家族と同じかそれ以上の絆を持っている。

そんな暖かな雰囲気を放つ場所に不似合いな姿をした者が不意に現れた。

彼らにとってその姿は最も信頼の置ける者のものであるため、一切警戒することもない。

たとえどんなに血まみれになっていようと、それは既に日常茶飯事の出来事なので気にもしないのだ。

「おかえり、エピオン・・・早く身体洗った方がいいよ?」

少女が身体の洗浄を勧める。

エピオンと呼ばれた者は一度頷き泉に向かう。

そう、エピオンこそが破壊活動をし悪魔と恐れられ管理局から重罪人として指名手配されている者の正体なのだ。

エピオンがきちんと洗浄しにいったことを確認すると少女はいそいそと着替えやらタオルなどの用意をし始め、男性はその姿を見て微笑みを浮かべる。

しばらくして装備を外し外部装甲をどこかに閉まったエピオンが戻ると少女の方を向いて小さく微笑みかける。

「ルーテシア、今戻った。」

微笑みかけるその姿はまさしく少年のものであり先刻、破壊活動をしていた人間とは思えない姿であったがその身にまとうオーラは戦士のものであり少年独特の頼りなさなど微塵もありはしなかった。

「おかえり・・・エピオン・・・」

ルーテシアと呼ばれた少女は、はにかんだように笑いエピオンに着替えとタオルを手渡す。

いつからか、ルーテシアはエピオンに家族に抱くような好意を抱くようになっていた。

心などないとエピオンと出会った頃は言っていたのだが少女は今ではエピオンと一緒にいる間ならば自分にも心があるのだと感じるようになっていたのだ。

「すまない・・・ありがとう、ルーテシア。」

エピオンが僅かに笑いルーテシアに礼を言うとは何かルーテシアは胸が締め付けられるように苦しくなるが、同時に胸の高鳴りを感じていた。

これが小さな奇跡の始まりの一つなのだと今は誰も分らない。だがいつか少女の想いは芽を出し花を咲かせるだろう。

また一つ、歯車が回り始めた。

一方、六課に拾われたデュオだが目の前で起きた出来事を理解しかねていた。

無理もないだろう。

普通、人間がいきなり現れて話し出し、自分がただの機械だと思っていたものの名前を名乗った日には理解をすることなど到底無理な話である。

話が停滞していたのにいち早く気づいたはやてだったがゼロの発言により思考回路がフリーズしてしまう。

「すみませんが私はリインフォースではありません・・・彼女に近い存在、それが私ですから。」

ゼロは笑顔で言うがそれを聞いたデュオ以外の人間の大半が凍りついてしまった。

自分たちの知る既に故人となってしまった人の存在に近しい人間が突然現れて驚かないわけがない。

ゼロは続けた。

「ただ・・・これ以上のことはマスターかマイスターに情報提供の許可を要するため何も答えられません・・・これだけは言えます。」

一呼吸の間を空け言うか言うまいか一度躊躇う。

なのはたちもそれを固唾を飲んで見守る中、ゼロは意を決して口を開く。

「私は・・・私たちは遙か数千年以上も過去からこの時代へ跳ばされたのです。」

驚愕の事実（後書き）

ティアナ「ところで……この話はSとSのどの辺りなのかしら？」

デュオ「まあ作者曰わく設立途中ぐらいみたいだぜ？」

スバル「それって全然話始まってないんじゃない？」

デュオ「気にすんな、作者も何か考えがあるんだろ？というか個人的にはやくこのジメジメした空気をなんとかして欲しいもんだね。」

シヤマル「そんな言い方はよくないわ。きっと作者もいっぱいっぱいなよ。生暖かく見守ってあげましょう？」

デュオ「つつてもな。というかアンタら誰？」

小話 どの辺り？完

決意、そして・・・（前書き）

長らくお待たせ致しました。

今回は意外な登場人物が・・・

決意、そして・・・

「千年以上も昔からの迷子になったわけか、俺たちは。」

ゼロの言葉を聞いてみんながフリーズしている最中、一人だけ冷静に考えるものがいた。

みんながデユオを一齐に見つめるが彼は首を軽く振り、

「俺じゃないぜ？だいたい、そんなありえない話を鵜呑みにするほど馬鹿じゃねえよ、俺は。」

と言い発言したことを全面否定した。

では先程の言葉は誰が言ったのか・・・赤毛の少女、ヴィータが皆を代表して一人ずつ視線を向け確認していく。

右から順番に部隊長のはやて、分隊長のなのはにフェイト、副隊長のヴィータ（あたし）にシグナム、第08陸士隊隊長のオッサンにロングアーチスタッフ。

何も変なところは・・・あった。

ヴィータが一人の中年男性をジトツとした目つきで見据え話し掛ける。

「オッサン、こんなとこでなにしてんだよ。」

はやてが上官に対してとんでもない話し方をするヴィータの口を慌てて手で制しその場の人間全員に語りかける。

「口の効き方など俺は気にせん、好きにすればいい。それよりも俺はコイツに用があるのだ。」

中年男性がデユオを指さすとデユオはめんどくさそうに顔を上げる。するとそこには以前にもまして額の面積の増えた顔見知りがいた。

「おま・・・っ、五飛！？お前も跳ばされたのか？というか何だが

「広くなってねえか・・・？」

そう、何を隠そうこの中年男性こそが嘗てガンダムに乗り戦ってきた5人の一人、張　五飛その人である。

五飛はデュオの言葉に青筋を浮かび上がらせるが年をとり冷静な考え方もいくら出来るようになったらしく、なんとか矛先を抜かずに堪えながら再び口を開く。

「・・・俺たちはとんでもない迷子になったらしいな。デュオ、俺や貴様がここににいるということは恐らく他にも迷い込んだ奴らがいる、お前はこれからどうする。」

五飛の問いにデュオは悩み始める。

こういった場合、得策なのは帰る為に何処かの組織に協力するか流れ着いた場所に帰化するかがベストである。

自分の見知らぬ土地で人捜しする行為の危険さは言うまでもない。

「ま、こういう時は協力するのが一番だな。仕事探すのにも体力がいるし時間も掛かる、それに比べて協力するのは仕事がある程度決まってくるからあとは寝床の確保をすればなんとかなるからな。」
デュオが協力すると言うと五飛は満足したのかサッと身を翻しその場を去っていった。

後にはやての口からまるで嵐がきたみたいやったわ・・・と語られたことから相当疲れてしまったのかなのは達は少しの間休憩をとることにした。

「そっぴや 안타、ゼロって言ったか？」

デュオが傍らにずっと立っていたゼロに問いかける。

「はい、私はゼロ・・・あなたともほんの少しの間ですが共に戦いま

したね、デュオ。」

ゼロが微笑みながら答える。

「そうか・・・アンタ、ヒイロと戦っていたわりにはヒイロと正反對な性格してるんだな。」

ゼロにはデュオの言っていることがよく分からなく首を傾げてしまう。

その反応を見てデュオはやっぱり正反對な奴だな・・・と思いつつ今後のことを考え始める。

そもそもデュオには魔法が使えない。

魔法を使うためにはリンカーコアが必要なのだがデュオにはないことが連れられてきて受けた検査によって判明しているからだ。

ならば何が出来るか・・・この世界で魔法が使えない人間というのはかなり不便なものだとデュオは思う。

そうこうしているうちに休憩時間は終了してしまい、デュオが今後どうするかを悩みながら会議は再開された。

「単刀直入に言う。デュオくん、悪いんやけど私らではデュオくんの力になれん。ちゅうよりも今のミッドの技術じゃ過去には帰れんのだ。」

はやてが休憩時間を使ってあらゆる方面に聞いて出した結論をデュオに伝える。

がつくりと肩を落とし落ち込むデュオであったが直ぐに立ち直り残

念そうな表情を見せながら笑った。

「ま、仕方ねえよ。普通に考えりゃ過去に行けるならこんな大規模な組織はいらないもんな。なんたって事件が起きる前に戻って事件を未然に防げばいいんだし。」

最初に聞いていた説明で管理局がどういったものかを理解していたデュオは今までの話などで疑問を抱いていたのだが、今のはやての話でその疑問は一気になくなった。

デュオは最初管理局を何でもあるSFみたいな世界だと思っていたのだが、管理局の施設に揭示されていた犯罪情報を見ていた時から自分が考えているほどSFな世界じゃないのではないか？そう思うようになり、そしてヘリの中でなのはから聞いた魔法の説明・・・魔法は基本的に物理法則に基づいて成り立っているというものから、もしかしたら時間までは不可能なのかもしれないな、と思うようになっていた。

まあその後熟睡したせいではにこっぴどく怒られたりもしたが・・・。

それ故にさほど大きなショックを受けることはなかった。

「デュオくん・・・強いんだね。」

なのはが思ったことを口にする。

デュオは精神的にとても強いのだとなのはは思ったのだ。

なぜならば彼には帰る場所が無くなってしまったのだ。

自分には帰る場所があるが彼には無い、もしも彼と自分の立場が逆であったときのことを考えるとなのははとても悲しくなった。

そして同時に自分の弱さを垣間見たなのはは少し戸惑いを覚えていた。

幼い頃寂しい思いをしても自分の殻の中に押し込めてきたなのは精神的な弱さを見てしまったから……。

そして次第になのははデュオにある想いを寄せ始める。

それはいまだかつてなのはが抱いたことのない淡い想い。

今はまだ形も分らない未熟な想い……少女の想いはやがて急速に成長するだろう。

それが良いことなのかどうかは誰にも分からない……今はただ少女の想いが悪しきものへならないよう切に願うばかりである。

sideルール

「ガリユ……頑張つて……エピオンも。」

広大な丘で閃光のみが見える程の速度で試合を行う二つの影、一方は悪魔のような姿をしたロボット、一方は甲虫類であろう虫の姿をした人型。

2人は互いの限界速度でぶつかり合い斬り合い戦い死合いを演じる。

ガリユと呼ばれた虫は悪魔の姿をしたエピオンに鋭い蹴りを放つがエピオンは上空へと逃れ幾重にも連なった刃から構成される鞭を振るいガリユ目掛け振り下ろす。

だがガリユがそのような遅い攻撃を簡単に食らうわけもなく両腕の爪を巧みに動かし鞭を捌ききる。

エピオンは鞭を捌くガリユに向け飛翔し剣を突き出すがガリユ

は狙い澄ましたかのようにエピオンの剣の柄を蹴って弾き飛ばし、素早く腕を掴み日本の武術の一つ、ジュードーでいうところの一本背負いを決め地に叩きつけそのままの勢いでマウントポジションを奪い首筋に鋭利な爪を突きつける。

「そこまでだ・・・今回の勝負はガリユーの勝ちとする。」

審判をかってでていたゼストの宣言によりガリユーの勝利が確定し、ガリユーはエピオンの上から退き右手をエピオンに差しだす。

エピオンもそれに応え手を差しだし握りしめる。

2人はタイプこそ違えども戦士なのだ、ということを経験したルータシアが思いながらガリユーを元の世界へと帰しエピオンに近寄る。

「惜しかったね・・・もうちょっとでガリユーに勝てたのに。」

ルータシアはエピオンにタオルを差し出しつつ言い、エピオンはそれを装備を外し元の姿となり受け取りながら答えた。

「勝ち負けは特に拘っていない。こういった実戦さながらの訓練はやること自体に意味があることだ。」

エピオンが額に浮かぶ汗を拭き取ったタオルを首に掛け地面に座り込む。

ルータシアもそれに習い隣に座りエピオンと話をするが元来奥手で引つ込み思案なルータシアは話をしようにも切り出せずにいた。

そこへ新たな影が現れる。

「ふわぁ・・・ねみい・・・ルールー、エピオン、旦那あゝおはよー・・・」

寝ぼけ眼を擦りながら体長約15cm程度の小さな少女がルータシアの頭の上に乗る。

ルータシアは少女を二三度撫でる。

「おはよ、アギト・・・もうお昼になっちゃったよ？」

ルーテシアに言われアギトと呼ばれた少女はルーテシアの頭から飛び立ち辺りを見渡すと太陽が頭の真上にあり思い切り真昼であることが分かる。

「うえええっ！？あたし、一体何時間寝てたんだよ！」

アギトは寝過ぎたことを自覚し叫び声を上げた。

ルーテシアはそれを五月蠅そうに聞きながらエピオンを見ると、エピオンも同じような意見のようだった。

「アギト・・・後悔するのではなく次の機会に生かせるようにすればいい・・・」

エピオンは喚くアギトに言うと呼き散らしていたアギトは少しの間ポカンとした表情を見せるがすぐさま笑顔を見せる。

「わかったよ、エピオン。明日からは早起きするよ。」

アギトがそう言うときエピオンは小さく頷き頭をポンと叩く。

ルーテシアはそれを羨ましそうに見ていると、ゼストに生暖かい眼差しを向けられていることに気付いて顔を真っ赤に染め上げる。

そうしているうちに昼食が出来たようだ。

今日の食事当番はゼストなのだがエピオンらは彼が料理しているところを見ていると毎回思うことがあった。

それは・・・

『割烹着・・・似合っていないな』

というものであるが本人は気に入っているようなので誰も口には出さない。

一度口に出した愚か者も居たが、その人は何故か三日間ほど行方不明となり次元世界の偏狭で見つかるという奇妙な事になっていたりもする為、彼らの判断は正しいものなのだろう。

今日もルーテシア達の日常はいたって平穏である。

side ???

「ぶえつくしよい！」

盛大なくしゃみをする男性。

見た目が博士のような男性だが居る場所はどことなく秘密基地のようで不思議な感じである。

「風邪でもひいたかな？まあいい、今の研究の方が重要なからね。」

男性は怪しげな雰囲気を漂わせ、とある部屋へと入る。

「もうすぐ・・・もうすぐ私の戦いの舞台が整う。それまで一時の平和を楽しむことだね、諸君・・・ふふふ・・・はっはっはっはっはっは！！！」

男性が狂ったように笑い、それに呼応するかのように黄色い光が瞬き始める。

世界が恐怖に満たされるまであと????日

決意、そして・・・（後書き）

今回は小ネタはお休みです。

というかちょっとガリユー強くしすぎたかな？と思わないでもないですが0システムが無意味な戦いと判断しているためエピソードは現在勝てていないと考えていただけたら幸いです。

誕生！相棒の名前は・・・！（前書き）

今回で暗い話しは終わりになります。

前回書いた割烹着ゼストが頭から離れないといつね、自爆したなあ
という思いです（笑）

とりあえずどうぞ！

誕生！相棒の名前は・・・！

「強い？違うな、覚悟を決めてるだけだ。」

デュオはなのはの言葉を否定した。

「覚悟？」

なのはにはいまいち理解できなかった。

いや、理解はしている。だがここで言うデュオの覚悟と自分の思う覚悟とは内容が異なる気がしてならないのだ。

「そう、覚悟だ。ここに跳ばされる前、俺達は平和のために戦った・
・多分平和を求める奴らからすれば英雄になるんだろうよ。けど
な、平和になったその後はどうなると思う？」

デュオはやるせなさそうにその場にいる人間全員に問いかける。

その問い掛けに数人が意味を理解し顔をしかめていたが大半の人間には理解できなかった。

意味は理解できなかったが、なのはだけはそれなりの答えを口に出して答えた。

「それは・・・やっぱり英雄なんじゃないかな？」

だがデュオは首を横に振る。

「いいや、違う・・・戦いが終わり平和になった世の中からすれば英雄なんかじゃない・・・単なる大量殺人をした犯罪者、もしくは危険人物に見えてくるもんだ。」

なのはの目が見開かれる。

デュオの語る言葉というのは管理局の行く末を感じさせるからだ。
もしも世界を管理局が犯罪の起きないような世界にした時、魔導師

は一般人からすれば何になるだろうか。

全員が全員では無いだろうが、魔導師は危険な存在とされるだろう。中世ヨーロッパで行われた魔女狩りのような出来事が起こらないとも限らない。

人間とは未知の存在を恐れ、本能的にそれを排除しようとするのだ。デュオの語る言葉とはまさにそれを如実に示したもののなのだ。

「だからガンダムに乗ったパイロットは最初から世界に排除される覚悟があるのさ。ま、無駄な足掻きくらいこつちもさせてもらっけどな、素直にやられる程人間出来てないもんでね。」

手をヒラヒラさせ軽く言うデュオだがその場に居た人間の背筋に戦慄が走る。

普通、デュオくらいの少年にはそれほど強い覚悟というものは出来ないものなのだが、目の前の少年はそれをいとも簡単にし、そして語っているのだ。

並大抵の覚悟では出来ないことだということも彼女等の仕事の関係上よくわかってしまった。

なのは達が物悲しそうにする中、デュオは極めて楽しそうであった。「ま、この世界に跳ばされたってことはあの世界に俺達はもう不要ってことなんだろうな。これからは自分の好きなように暮らしていくさ。」

やはり何処にいてもデュオはデュオなのだった。

「デュオく「はいはい、終わり終わり、暗い話しはしゅーりよーだ。」「・・・うん。」

なのはが何かを言おうとするがデュオがそれを打ち消す。暗い話しが続いていたのであえて邪魔したのだ。

「そっぴゃあ・・・なのはの魔法は見たけど他の魔法ってどんなの

なんだ？」

早速話題を変えるデュオ。

はやてがそれに便乗するかの如くニヤリと笑い映像を呼び出す。
勿論なのはらの戦闘記録だ。

「魔法言うても種類は沢山ある。なのはちゃんは砲撃、私は拡散、ヴィータとかシグナムらは近接、あとザフィーラとかシャマルみたいなのは補助型の魔法、ああ、フェイトちゃんは高速軌道型で管理局でも一、二を争う速さの持ち主さんなんよ？本人の私生活は至ってゆっくりさんのおっとりさんやけどなあ。」

はやてがニタニタ笑いながら順番に映像を出していくと途中ヴィータが「やっぱハンマーはいいよな？なんつか漢の武器みたいでさ」と言いシャマルに「ヴィータちゃん女の子じゃない」と突っ込まれた以外特にデュオは表情を変えなかったが、フェイトの戦闘記録が映るとその表情は一気に固まった。

「なんやあ？デュオくんはフェイトちゃんの戦闘服に興奮してもうたんか？」

はやてがニタニタしながら茶化す。

「んなわけあるかつ！！俺が驚いたのはこれのせいだ。」

デュオがフェイトのデバイスを指差す。

「バルディッシュ？バルディッシュがどうかしたの？」

フェイトが不思議そうに首を傾げる。

「ああ、相棒の武器にそっくりなんだよ。なあ、バルディッシュって言ったか？ちょっと見せてくれないか？」

デュオが手を合わせて言うとならフェイトは快く引き受けバルディッシュを起動させ、ハーケンフォームにしておく。

「やっぱそっくりだ・・・。」

見た感想はそっくり、というよりは瓜二つであった。

「そんなに似てるの？」

フエイトが聞くとデュオが頷く。

そして今まで一言も発していなかったゼロが突然大画面で映像を流し始めた。

なのは達は不思議に思いながら映像を見ているとそこには

「わぁ・・・天使みたい・・・」

なのはが思わず見とれたもの、天使のような姿をしたロボット。ゼロが飛んでいた。映像は次々流れていき悪魔のような姿をしたロボットで映像は止まり、そのままロボットの行動を映した映像が流れ続ける。

そのロボットこそデュオの相棒、デスサイズである。

デスサイズが縦横無尽に飛び回り敵と思われるロボットを切り裂く度に歓声が上がリ、さしものデュオも見せ物にされているようで精神的に疲れを感じていた。

そして映像が終わり画面が消えるとみんなが一斉にデュオを注目する。

さすがのデュオもこれには怯んでしまい思わず椅子から立ち上がりそうになるがなんとか我慢し座り直す。

「確かにそっくりだったね。バルディッシュ、何か知ってる？」

フエイトはダメ元でバルディッシュに問うとバルディッシュが「はい。」と答えた。

バルディッシュは続けた。

「彼女は私の母体ですので・・・マイスターリニスが私を造る際、彼女を母体に私を造りました。今出します。」

普段の無口さを保ったまま話すので普通なら一分も掛からない話をたっぷり五分かけてバルディッシュが話すと淡くバルディッシュが輝き出し思わずフエイトは机にバルディッシュを置く。

するとバルディッシュの横に黒い粒子が集まり人の形になり、やが

て固体化した。

そこには身長約90cm程度の少女が眠っていた。

二度目なので流石に驚きはしなかったがみんな目が疲れていた。

何せ10年も付き合っていた仲間のデバイスにこんなに幼い女の子が隠されていたなど知って疲れないわけがないのだ。

「……なあ、俺の部屋ってあるか？どうも疲れてるみたいなんだ……。」

「奇遇やなあ、あたしもや。というわけで解散！」

デュオが、そしてはやてが誤魔化し流そうとするのをなのはが二人を捕まえ中断させる。

「何を言ってるのかな……二人とも。会議はまだ途中だよ？途中で放り出したら会議の意味……無いじゃない……」

なのはの背後に魔王が見えてくる。

「二人とも……ちよつと、頭冷やそうか……」

途端、会議室（シャマルの結界により限定空間作成されているので本来の会議室ではない）がピンク色の光に包まれるなか、デュオは思った。

『ちよつとじゃねえだろ、これ……というか……うん、これ……魔法じゃねえよな。』

誕生！相棒の名前は・・・！（後書き）

デュオ「ようやく相棒のお出ましか？というかなんであんな小さいんだ・・・」

シャマル「さあ？多分作者の好みなのよ。」

デュオ「ん？けどよ、これを書いてる作者は『もっところ、ボンツキュッポーンツなのが好きなわけ！オッサン幼女は圏外なのよっ！』とか言つてたのを聞いたことあるぜ？」

シャマル「つまりシグナムみたいなのがいいんですね・・・」

デュオ「多分な。けど一応はやて派らしいからわかんねえぞ。」

シャマル「・・・・・・・・ちよつと作者さん・・・色々ぶちまけちゃつて下さい。」

小話 お好みは？ 完？

協力、そして・・・（前書き）

電車に閉じこめられながら更新してみたり。
いい加減太ももあちいんだよーっwwww

とかね、どうでもいいですね、はい。

今回は丁度一区切りついたので短めです。
始まりの歯車編ラストエピソード、はじまります。

協力、そして・・・

結界で守られていた会議室の中でズタボロになり倒れる人物が二名出ている最中、ある場所では奇妙な会話がされていた。

「それで？説明したものはどこまで完成した？」

壮年の男性が白衣を着た最近中年になった男性に訊ねる。

「そうだねえ、だいたい七割といったところだね。何せ私の可愛い娘達を完成させるほうが私としては重要なのでね、君の依頼はあくまでついでのだよ。」

中年男性は嘲るように答えると壮年男性が憤怒したのか詰め寄り中年男性の胸倉を掴もうとするが、中年男性はそれを軽くあしらい背を向ける。

「くっ・・・まあいいだろう。完成さえしてしまえばあとはいくらでも量産出来るからな。」

壮年男性は悔しそうにしながら踵を返しその場を後にしたのだった。

「ふん、つまらない男だ・・・やはり彼もまた凡人ということか。このような旧時代的な機械人形如きが役にたつなどということに気付けないとはね。まあ暇つぶしにはなるがね。」

中年男性はつまらなそうに眩き、何人もの少女の入られている生体ポッドのシステムを調整し始める。

彼からすれば魂のない人形など所詮玩具程度にしか感じないのだ。闘いとは人と人がぶつかってこそ価値があり、美しいのだ・・・中年男性はそう思っているのだ。

「さて、あんな玩具とは違って君達は私の造る最高の芸術品だ。」

男性がシステムのエンターキーを押し込むと全てのポッドが調整を開始する。

「平和を謳歌し情眠を貪る凡人達よ、もう直ぐ君達に最高のショーを見せてあげよう。主役など居ない最高のショーをね。」

暗い闇の中に男性の笑い声が響き渡るのに時間はかからなかった。

一方会議室内ではダウンしていた二人が漸く復活したことで会議は再び始まるうとしていた。

「えー、ほな会議再開や。」

はやてが手を軽く叩きみんなに席に着くよう促す。

みんなが席に着いたのを確認すると早速はやてがデュオの膝に座る少女に視線を向ける。

どうやら先程の騒ぎで目を覚ましたらしく、今は上機嫌でデュオの膝に座って楽しそうにしている姿を見ると思わず表情が緩んでしまう。

隣に座る堅物なシグナムでさえ頬が緩みかけている。

微笑ましい時間が流れるなか、デュオが少女に質問をしていた。

「なあ、お前「おまえじゃないのよ、あたしにはちゃんとデスサイズって名前があるのよ」・・デスサイズはアレなんだよな・・？」
デュオが恐る恐る訊ねるとデスサイズと名乗った少女が頷くことで答え、デュオはそれに対して溜め息について応えた。

無理も無いだろう、以前共に戦場を戦い抜いた相棒がこんな幼い少女となって溜め息をつくのを我慢できる人間などそうはいない。
デュオはやるせない気持ちでいっぱいであったがどこか安心していった。

幼い少女になってしまったとはいえ、相棒と一緒に居るというのは安心できるものなのだろう。

「そっぴや今後どうするかまだ決めてなかったな・・・なあ、何か俺に手伝えることないか？メカの整備ぐらいならできるんだけどよ・

・

デュオがダメ元で聞いてみる。

するとはやてが「ほんならうちの整備班を手伝う、基働いて貰えるか？」とあっさり就職先を紹介してくれた。

さすがのデュオもこれには呆氣に取られてしまい、みんなに笑われむくれていた。

笑い声のする中、小さな手がデュオの服を引っ張っているのにデュオが気づき少女の方を向くと少女が笑いかけてきた。
デュオも笑い返してやると少女が口を開いた。

「整備なんてつまんないのよ、あたしと一緒に戦うのよ！」

まず激しい闇を連想させる黒い光がデユオを包み隠し、普段着ている神父を連想させる黒い服の上からなにやら奇妙な組織体が組み上げられ変型の鎧が造られる。

デュオは漸く静かになったことに気づきまず自分の姿を確認する。するとそこには

デスサイズガンダムの独特の装甲を身にまとう自分が居ることに驚いていた。

なのはがデュオをジツと見つめているとそれが何なのか気づいたら
 しくかなり驚いていた。

「ええええー……っ！？デユオくんがロボットみたいになっちやってるよー……っ！！？」

なのはの間近に居たフェイトに至ってはあまりの大音声に目を回し
 気を失っていた。

それほどに大きな声だったのだ。

「なのは・・・五月蠅いぞ？」

ヴィータがなのはに言うとなのはも自分がどれだけ間抜けな行為をしたのかに気づき羞恥心から顔を真っ赤にして何も言えなくなっていた。

全くもって忙しい奴だ、とヴィータは思うが仕方ないかとも思う。普通、目の前でいきなり人間がロボットみたいになったらなのはみたくない反応をするか現実逃避するかのどちらかの反応を見せるからだ。

だが五月蠅いのもまた事実なのでヴィータはなのはに冷たい視線を送るのを止めない。

「ま、まあ何はともあれソレは何なんかな？」

はやてがデュオに訊ねる。

「よくわからねえ・・・けど何ができるかは分かるしこれからどうするかも決まった。」

デュオは一呼吸間を空けるとはやてに向かって宣言した。

「俺はこれから機動六課に協力する、勿論戦闘隊員としてな。」

デュオがニカツと笑いながら宣言するとはやては初め鳩が豆鉄砲を食らったかのような表情を見せるがやがてそれも不敵な笑みへと変わっていった。

「そうか・・・ほんならデュオくんには短期間集中特殊講義と訓練を受けて貰う。」

デュオが嫌そうな表情を見せるがはやては無視する。

「先生はあたしら機動六課メンバーな。明日からは各員に先生をつけるように、忘れたらおしおきな？」
はやてが楽しそうに・・・否、明らかに楽しんでいる声色で告げ会議は終わりとなった。

協力、そして・・・（後書き）

気づいたらアクセス7000超えたよ・・・これも偏に皆様が読んでくれたおかげです、ありがとうございます。

作者的にアクセス伸びると非常にやる気が出ます。

計算上、今現状では約1200人程度が読んでくれてるみたいです。

ご意見や感想なんかはアクセスよりも励みになり頑張ろうという気持ちになると言われたのですが本当なんだなあと思いますよ。
今は少ない感想ですが見るたびに励まされた気持ちになりますからね。

それでは今後も頑張っていきますのでよろしくお願いします。

尚次回は一気に時間はぶっ飛んで例の試験の話になります。

それでは、また。

魔導師試験（前書き）

更新遅れて申し訳ありませんでした。

なお今回でデスサイズたちの謎を少し明かすつもりでしたがどうにもあと一二話は後になりそうです。

魔導師試験

「よし！準備完了だよ、ヒイロ。」

青い髪を短くしボーイッシュな髪型でボーイッシュスタイルの少女が茶髪の痩身で小柄な少年に話しかける。

「そうか・・・スバル、油断するな、一瞬の油断が命取りになる・・・」

ヒイロと呼ばれた少年がそう言うのとスバルと呼ばれた少女の表情は自然と引き締まっていた。

二人が引き締まった表情で待つこと一分、なにもない空間に映像ディスプレイが出現し試験管と思しき淡い水色の髪にバッテンマークの髪留めをしたどうみても10代前半かそれ以下の少女が顔を出したのでスバルはやや呆気にとられていた。それをヒイロは視線をやることで注意しスバルはすぐに表情を再び引き締め背筋を伸ばす。

ディスプレイに顔を出した少女は一度クスリと笑った。

「ふふ、そんなにビシツとしなくて大丈夫ですよ？私は今回お二人の試験管を勤めます、リインフォースIEE空曹長です、よろしくですよう」

リインフォースIEEと名乗った少女が元気に挨拶をして敬礼すると二人も同じく敬礼した。

「ヒイロ・ユイ二等陸士、スバル・ナカジマ二等陸士、お二人が今日受けるのは魔導師試験Bランクで間違いありませんね？」

リインが確認をする。

「間違いない。」

「はい、間違いありません。」
と、二人が答える。

「はい、では今回の試験の説明をしますね？」

リインの説明を大まかに表せばこうだ。

目的は指定区域へ制限時間内に移動すること、その際破壊指定のターゲット全ての破壊をしていなければならない。
また破壊してはいけないダミーも存在しそれを破壊した時点で任務失敗とし不合格、また戦闘不能になった場合も不合格とする。
なおダミーターゲットさえ破壊しなければビルを破壊することもできるというものであった。

「それではシグナルが青になったら開始となります。」

3

2

1

0「GO！」

まず先行してスバルがアスファルトの上をローラーブレードに魔力を送り込み走らせる。

「いくぞ・・・W^{ウイング}セットアップ。」

ヒイロが緑色の小さな宝玉を懐から出し握り締めてから呟く。
するとヒイロの腕や胸部に白と青で色づけされた装甲が装着されていき最後に身の丈程ある巨大は銃と赤と白で色づけされた盾が装備

されていた。

その姿はまさしくWガンダムのものである。

違うのは顔がガンダムではなくヒイロのものであることくらいである。

ヒイロは体を沈め足に力を溜め一気にそれを解き放ち大きく飛翔し先行しているスバルの下へと急行するのだった。

少しばかりブーストをふかして飛んでいるとハムスターのように頬を膨らませたスバルを見つける。

「遅いよヒイロ、待ったんだよ？」

「どうやらたかだか30秒待たされたのが不満のようだった。」

「たかが30秒待たされただけだろう、遅いわけではない。」

ヒイロはバツサリとスバルの発言を切り捨てると状況を把握するためWに搭載されたセンサーで辺りを調べ出す。

スバルも最初こそ不満気にしていたが試験の最中なのを思い出し辺りの様子を窺う。

「熱源反応約70か・・・内破壊指定のものが50、少しばかり多いな。」

ヒイロが思案する最中スバルは脳天気な笑みを浮かべていた。

「よし、まずダミーのないこのビルを破壊・・・その後破壊指定ターゲットの少ないビルをスバル、お前に頼む。俺はここを制圧しておく。」

ヒイロの言う作戦とはまず、10機ほどの破壊ターゲットが存在する小さなビルを破壊しダミーばかりで破壊ターゲットが7機ほどしかないビルをスバル、残りのターゲットが集中する広場を自分が

制圧するというものだった。

普通ならば止めるところだがスバルはヒイロを信頼しているのか止めず、自分の担当となったビルの方角へと疾走していた。

「ミッション開始。」

Wの管制人格が低い声で告げると同時に一つのビルが焦げ後すら残さずに消え去っていた。

「えぐいなあ。というかまさかホンマにビル壊してまうとは思わなかったわ。」

試験会場上空に滞空するヘリの中ではやてが呟いた。それもそのはず、ビルの破壊は許可されてはいるが本当にやるとは思わないからだ。

「あはは・・・まあいいんじゃないかな？ダミーターゲットは破壊していないみたいだね。」

フェイトが苦笑いしながら言うがフェイトもやはり驚いていた。

ヘリの中でいろいろ言われているの知らないヒイロは次の制圧地点へと飛び出していた。

一方、ヒイロに指示されたビルの制圧を始めたスバルであったが苦戦していた。

なぜならばそのビルは破壊ターゲットは7機と少ないが17機のダミーターゲットが存在するためなかなか攻撃できないでいたのだ。

「くうっ・・・この、調子にのるなあっ！」

スバルが破壊ターゲットから撃たれた熱線を力任せに弾いて勢いをそのままに破壊ターゲットへと突撃した。

考えることを知らない機械は愚直にも突っ込んできたスバルに熱線を放つがスバルは身を低くしてかわしそのまま拳を振り上げ破壊ターゲットへと拳を叩きつけ、内部の機械部品を掴み引きずり出すという荒技を繰り出し一機目を破壊したのだった。

勢いづいてスバルは単純な行動しか出来ない機械では止めようが無かったらしく3分もしないうちに破壊ターゲットは全滅していた。

「次はヒイロの援護！」

スバルはヒイロが先行した最も破壊ターゲットが多い広場へと急いだ。

いくらヒイロといえども一人で機械の大群を相手にするのは無理だと思ったからだ。

だがスバルが着いた時には全ての決着がついた後であった。

「そ、そんな・・・うそ・・・」

スバルが呆然としながら呟く。

そこにあるのは・・・ヒイロの姿であるのだが、破壊ターゲットの機械油を全身に浴び、まるで血にまみれたような姿の天使、死天使のような出で立ちとなったヒイロがいたからだ。

「遅かったな、残りは散発的に設置された幾つかの破壊ターゲットを除けば説明にあった機体のみのようだ。急ぐぞ。」

ヒイロが何事もなかったかのように言うがスバルは未だに信じられずにいた。

「何をしている、置いていくぞ。」

ヒイロがスバルに言うがスバルは動こうとしなかった。

「ヒイロ、あなたは一体・・・」

その先をスバルは聞けなかった。

ヒイロに聞いてその後どうすればいいのかわからないからだ。

「俺の正体ならば話しただろう。それ以上でもそれ以下でもない、俺は。」

ヒイロはスバルが何を聞きたいのかわからなくなったらしくそう答えた。

スバルも納得したのか頷き気持ちを切り替えた。

「そう、だったね・・・それにヒイロが何であろうと私の友達には違うもんね。」

いつものように明るく笑った。

「いくぞ。」

至って冷静に言うヒイロ。

「ヒイロ、冷たいよ。」

脳天気と言うスバル。

試験中ではあるがわずかばかり和やかな空気が生まれていた。

「・・・」

険しい表情をするはやて。

「どうかしたの？ 凄い表情してるよ？」

フェイトが何かあったのかと心配する最中ははやては始終険しい表情を崩さずにいた。

『あの動き、どこかで見たな・・・』
はやての中に小さな靄が生まれていた。

「ね、ね、最後のターゲットは狙撃してくるんだよね？」

スバルがヒロに確認するとヒロは首肯して答える。

やはりという顔をするスバルを見ながらヒロは一つの案を持ちかけた。

「俺が囫になる、その間にお前がターゲットの後ろから接近、お前
のとおきをおきをつけてこい。」

ヒロはそれだけ言って開けた大きな道路のド真ん中になつ。

スバルは最初わけが分からなかった様子を見せていたがやがて内容を理解し表情を今までで一番真剣なものにしていた。

スバルが飛び出すのと最後のターゲットがヒロを狙撃するのが全く同じタイミングで始まった。

「やはり思考することが出来ない機械か・・・単純な手に引つかかる。」

眉一つ動かさずにヒロはギリギリまで動かず当たる寸前に僅かに体を横にずらし避けた。

避けられるものは極力避け、タイミング的に避けられないものをフィールドでガードしているヒロ、そしてターゲットがヒロを攻撃している間にスバルは気づかれないよう静かに移動し途中遭遇した破壊指定のターゲットを殴り壊しながら最終関門であるターゲットの背後へと忍び寄る。

余りある体力をフル活用しスバルはビルの階段を駆け上がり目標の

丁度真後ろにある目の前のビルよりも少し小さなビルの屋上にたどり着き拳を床に叩きつけ己の使える魔法の中で最も特殊な魔法を発動した。

「ウイングロード！」

拳が叩きつけられた場所から空色の輝きを放つ魔力で作られた道が目標のいるビルまで伸び、橋が出来上がった。

そしてその上を一切休憩せずにスバルはローラーブレードに魔力を送り込み橋を駆け登り、ビルの窓ガラスに突っ込み目標の真後ろに立つ。

目標である破壊指定大型ターゲットは突入してきたスバルに照準を向けたが全てが遅かった。

クロスレンジでのスバルの爆発力はヒイロを凌駕するものがあり、スバルは高い身体能力を生かし懷に潜り込んで拳を顔の横まで引き下げ魔力を集中させる。

そして全ての想いを拳に寄せ放った。

「デイバイイイイン・・・バスターアアアアッ！！」

空色の魔力が魔力の奔流となり目標を飲み込み、ビルの壁を吹き飛ばしたその技、彼女が最も尊敬する少女のものを真似たもの。

威力は似て非なるものであったがスバルにとってはどうでもよかった。

目標を文字通り欠片も残さず破壊したスバルは安堵の表情をみせ、自分が抜いた穴からヒイロに手を振る。

少しの間スバルが待っているとバードモード（首はちゃんと前を向き背にシールドを装着したような姿だが）に変形したヒイロがやつ

てきた。

「スバル、乗れ。残機は一機、ゴール間近にいる・・・急ぐぞ。」

ヒロがビルに作られた風穴から中に進入しスバルの足元で停止、スバルに背中に乗るよう促すとそれを了承したスバルが背中に跨ると直ぐに大空へと飛び立つのだった。

こうして最後のターゲットをヒロが破壊しゴールしたスバルとヒロの試験は無事に終わったのだった。

「へえ、思った以上にやるね・・・これは将来が楽しみ、かな？」
長い茶髪をサイドアップにし管理局の教導服に身を包んだなのはが
呟く。

直接的な試験管はリインが務めてはいるが、彼女はまた違う理由から試験管として試験の様子を見ていたのだ。

「次の二人はどう戦うのかな・・・さすがにあの状態だと楽勝っていうわけにもいかないだろうし・・・何かあった時すぐ駆けつけられるようにだけしておいてもらえるかな？」

なのはは己の愛機に語りかける。

すると愛機である赤い宝玉の待機モード状態のレイジングハートが控えめに輝き応え、なのはが満足そうに笑った。

「さあ、頑張っていこうか。」

誰に聞かせるでもなく一人呟くのはであった。

そしてヒイロ達の後にもう一組、試験を受ける者が居た。

一人は凜とした眼に整った顔立ち、特徴的な橙色の髪を2つに結い上げツインテールにした少女、名前をティアナ・ランスター、そしてもう一人が過去から未来へと迷い込んだ少年、デュオ・マックスウェルである。

デュオはいつもと変わらない服装だがティアナの方は違っていた。訓練校では動きやすいジャージを着ていたのだが、試験ということもあってか今日はどこことなく西部劇に出てくるガンマンのような出で立ちであった。

「相変わらず堅いね、もつと楽にしるよ。」

デュオが真面目な表情をしたティアナに茶化すように言うと無言でティアナは睨み返していた。

言葉で語らなくともそれは「静かにしてろ、黙れ、シャラップ」そんな感じであることが伺えた。

デュオは肩を竦め茶化すのを止めた。

「んじゃま、ここからは…最初から最後までクライマックスだぜっ
！」

『デスサイズ、リーオーフォームスタンバイ！』

ニヤリと笑い大空に向かって叫ぶデュオ。

するとどこからともなく身長と同じくらいの長さの黒髪、翡翠色の目をもつ幼女、デスサイズが現れデュオに抱きつく。

そして黒い光に二人が包まれ光が無くなったとき、デュオのいた時代の機体の一つ、リーオーによく似た姿となったデュオがいた。

そもそもリーオーは簡素な造りに無骨なデザインではあるがその性

能は侮れない物があり、使う者によればまさに鬼神のごとき存在となれるであろう機体である。

そんなリーオーの姿となったデュオではあったが多少の不安があった。

まずリーオーは格闘戦に長けた機体のため遠距離用の武装は後付けのものしかなく、取り回しもよくはない。

そして中距離用にライフルもついてはいるのだが火力が弱いのだ。格闘戦に限って言えばガンダムと対等とまではいかないが上手く立ち回りさえすればまず負けないほどに強い。

それにデュオの扱う獲物は鎌であり剣ではない。

この違いが後々首を絞める結果にならないことをデュオは願った。

ティアナがデュオの武装完了を確認したのを見計らったかのようなタイミングで試験のスタートを知らせるランプが青に変わった。

どうやらデュオが長々と武装を起動している間に試験管の説明があり試験開始を告げられていたようだった。

デュオはなんの説明もないまま試験に望むこととなった。

なんとも幸先不安なスタートである。

こうして、デュオとティアナ、人間的だけでなくタイプまで真逆な二人の試験が始まった。

魔導師試験（後書き）

読んで下さいましてありがとうございます。

読んでいて多分「え？ヒロ？何があったんだ？」という思いだと思いますがご心配なく。

ヒロが何故そこにいるかはデュオの試験終了後に訓練校編で説明が入ります。

なお次の話は試験の話のみになります。

ヒロやデスサイズたちのことが非常に気になっているとは思いますが今しばらくお待ちくださいませ。

再会（前書き）

どうも長らくおまたせいたしました。
今回はティアナの試験の話になります。

再会

訳の分からないままデュオがスタートしたところでティアナから通信が入った。

『アンタ、どうせ説明聞いてなかったでしょ？ いい？ 壊して良いターゲットのデータを送るわ。残りは壊すな！ ついでに前は頼むわ、背中には任せて。』

一方的にまくしたてるティアナにデュオは哑然とするが頭では何をすればいいのかきちんと把握していたのか、すぐに表情が明るくなり走る速度が変わった。

「了解、撃ち漏らしとかは頼むぜえ？」

デュオがニヤリと不敵な笑みを見せガンダム程の速度は無いものの瞬間的な出力の高さには目を見張るものがあるリーオータイプの特性を生かし、脚をグツと縮め飛び上がる瞬間にブースターを吹かし斜め前へと大きな跳躍を見せる。

そしてあつという間にティアナの真上を通り過ぎ3m離れた地点に着地。

「待たせたな！ こっからは最初から最後までクライマックスだぜ！
！！」

楽しそうに言うデュオだがティアナは冷たい目で見ていた。

「うつさい、馬鹿。さつさといくわよ。」

なかなか辛辣な言にデュオの表情は少し固まっていたがそうしてばかりいても制限時間が迫るばかりなので、すぐに表情を引き締めて

いた。

「へえへえ、分かりましたよっと。んじゃま、データ送るぜ？通信はフルオープン、データは随時更新だ。」

おふざけはここまでということなのか突然真面目な顔で話し出す。

「了解、さあ・・・いくわよ！」

二人はビル群に突入し戦闘を開始した。

一方、ヘリの中では先程のギスギスし居心地の悪い空気はどこへやら、和んだ空気が流れていた。

「へえー、あのタイプは五飛隊長のどこにもあるものやねえ、ホンマはあんなに強いんや。」

はやてが空間モニターで見ている中で既にデュオが10機程を叩き斬った映像に関心したのかしきりに頷いていた。

「そだね、前見たときはちょっと鈍重そうな感じだったけどデュオの動きは凄く軽くて、それでもどこか力強さがあるね。」

フェイトも本来のポテンシャルを引き出されたリーオーの能力の高さに目を見張り、そして微笑みがこぼれていた。

「ま、固定式の銃座程度じゃああの二人は止められんやろうなあ。片方は格闘戦が得意で片方は精密射撃、前衛の死角におけるのんや漏らしたのんを後ろから破壊しながらの猛進。これは予想以上にやってくれたわ。」

楽しそうに笑うはやて。

短い期間で色々なことをデュオに教えてきた一人としては弟子のよ
うな彼が善戦しているというのは、嬉しい限りらしい。

「けど一番の難問、中距離狙撃型の大型ターゲットにその陣形は無
駄や。さて、どう対処する？」

クスリと笑うはやて、反対にフェイトは心配なのか少しばかりオロ
オロしていた。

また、別の場所は別の場所でするいろいろな大変なことになっていた。

具体的には

「デュオくん凄くい」

無邪気な笑みで目を輝かせたのはが甘ったるい声でデュオの試験
を見ていた感想をいう。

先程からこのような発言ばかりしているため間近にいた試験官であ
るリインは表情を曇らせていた。

それもそうだろう。

試験の様子を見ているだけだというのにこのような甘ったるい声を
延々と聞かされていれば表情も曇るというものである。

「あのう・・・他でやってもらえませんか？具体的にははやてちゃ
んの前とかで。」

だからカリインも思わず言ってしまったがなのは聞く耳を持たな

いのか相も変わらず甘ったるい表情のままであった。

なのは達のいる部屋に甘ったるい空気が充満するなか、デュオとティアナはターゲットの八割程度を破壊し終えていた。

「っはあーっはあー・・・あゝ・・・そっちはまだいけるか？」

デュオが肩で息をしながらティアナに聞く。

「ええ。アンタが頑張ってくれたからね、まだ余裕があるわよ。」
申し訳なさそうな声で答えるがデュオは気にするなとも言いたいのか肩を竦めて返した。

「・・・そう。」

ティアナは相変わらず申し訳なさそうにしながら頷いて気持ちを切り替える。

「あと残ってるターゲットはこの先の大型ターゲットにゴールまでの道のりの数機だけみたいね。」

空間モニターでルート確認しながら作戦を考える。

が、考えれば考えるほど眉間にマリアナ海溝もびつくりの深さの皺が刻まれていった。

はつきり言おう、有り得ない程に怖いと。

デュオもその恐ろしい表情に思わず後退りしていた。

「ティ、ティアナさん？すんげえ怖い顔してますが何か？」

思わずさんをつけたデュオにティアナが邪魔すんなど睨みつけ答え、あまりの怖さにデュオはティアナとの接し方を今一度考え直すべき

かどうか真剣に悩むのであった。

「・・・仕方ない、あんまり燃費よく無いんだけどこの際やるしかないわね。」

心底苦痛そうに言うティアナ。

どうやら作戦がきまつたらしい。

その作戦とは、ティアナが使える魔法の一つ、幻術を駆使したものなのだが今のティアナでは恐ろしく燃費が悪く大量の魔力を消費するあげく、非常に衝撃に弱いのだ。

その幻術を使いデュオの大群を生み出し大群に紛れ込ませた本体が一気にターゲットを潰すという危険な勝負をしなければならぬデメリットがある。

もしもティアナの魔力がデュオがターゲットに辿り着く前に尽きてもアウト、移動中に本物のデュオがやられてもアウト、幻術を生み出すティアナが発見され狙撃されてもアウトという非常に厳しい作戦だがやるしかないのだ。

スバルほどの爆発力と一気にビルへ突入できる足がデュオにもあれば違う作戦もあっただろうが、あいにくデュオの場合瞬間的な爆発力がスバル以上にあるだけで持続的な爆発力は持ち合わせていない。

つまりこの一か八かの作戦以外に道はないのだ。

「ま、これしかねえってんならやるしかないだろ。援護頼んだぜ？

ティアナ！」

デュオはティアナを信じ笑いかける。

「任せときなさい、こちらら前衛をサポートするのが仕事なのよ？
これくらい楽勝でやりきる！」

力強く言い切られ、デュオは久しぶりに悪い笑みを浮かべていた。
そしておふざけという名の本気が発動するのだった。

「ティアナ、上手くいったらデ「お断りよ」」・・・まだ最後まで言
ってねえのに・・・」

いい笑顔で拒否するティアナとおふざけが瞬時に失敗し落胆するデ
ュオ。

「私の本命はアンタじゃないと何度言えば分かるのかしら？いい加
減脳天に風穴開けてそこから紙をねじ込んで無理矢理記憶させてあ
げようましようか？」

ティアナは続けて笑顔のまま辛辣な言葉を投げつた。

そう、このやりとりなのだが昔・・・と言ってもここ一二週間程度
前からだが、度々行われているのだ。

その度に言動が酷くなるのだが今回は格別に酷く、さすがのデュオ
も落ち込み地面にのの時を書きいじけていた。

このやりとりがされる理由をティアナは分かつてはいるのだがやは
りこの反応だけは変えないつもりだった。

「へえへえ、お前の本命は別に居るつてのは何回も聞いてるから知
ってるさ。さて、もう準備出来たんだろ？始めてくれ。」

何時でも走り出せるよう構えるデュオ。

そしていい感じにリラックスしたティアナの猛烈なサポートが始ま
った。

物陰から一人飛び出すデュオがへりから見えていた。

「うん？なんや？デュオくんも前の子みたいに弾丸弾いてもう一人を突入させるつもりか？せやけどティアナゆったかな？確か。あの子にはあのターゲットを破壊できる程強い魔法は無いはずや。どうするつもりなんやろ。」

はやてはどうやら先程の試験の光景が目には焼き付いているようで、デュオの姿をヒイロと重ねて考えていた。
隣にいるフェイトも同じ考えらしく二人揃って首を傾げていた。

ターゲットの下へと駆け抜けるデュオをターゲットが感知しロックオンする。

そしてターゲットから発せられた光の弾丸がデュオを貫いた時、異変は起こった。

撃ち抜かれたはずのデュオが物陰から複数現れたのだ。

最初は一体だったものが次は三体、そしてその数は時間の経過と共に増えていた。

それを感知したターゲットは確実に一体ずつ撃ち抜いていくがいかにせん数が次々増えていくために撃ち漏らしが出始めていた。

その瞬間を見逃すデュオではない。

ティアナが幻術で12体のダミーを走らせたタイミングに合わせ駆け出すデュオ。

辺りにも複数存在するダミーに紛れているため本物の識別は他者からは識別困難な状態になった。

どうやらターゲットの方もどのデュオを撃てばよいのか判断出来ず攻撃の手は始めに比べ緩慢になっていた。作戦は成功のようである。

しかしデュオは焦っていた。

なぜなら幻術の消費魔力というのは決して少なくはないからだ。長時間の幻術維持に大量発生、加えて遠距離操作とその総消費量とティアナの魔力量を考えれば限界は近いはずだからだ。

そしてその焦りは一つの小さな異変に繋がってしまった。

デュオの足下にあった小石を蹴り飛ばしてしまったのだ。

ターゲットはそれを異変と捉え、過去、ダミーによる物理的接触があったかをデータベース内から瞬時に探し出し無いことを確認し認識していた。してしまったのだ。

機械というのは恐ろしく利口だ。

一度データベース内にデータを記録しておけばイレギュラーな事態が起きてもデータを参照にすぐさま対処しようとする。

そのデータの処理速度は人間のソレよりもずっと早く、人間が意識するころには機械の中では対処方法が判明してしまっているからだ。

今回のこの異変にもやはり機械は反応しすぐさま答を導き出していた。

異変を起こしたものを排除せよ、と。

だがデュオは気づかない。

無意識の行動というのは総じて認識し難いものだからだ。

そして目標まであと100m程になった時、一筋の熱線がデュオへと放たれた。

デュオがその攻撃を認識した時には既に遅かった。

熱線が。。。に直撃し辺りを煙で包み込んだ。

デュオが目を開いた時、目に映った光景に驚いた。

目に映ったのは・・・

試験会場、しかも目標とのこり僅かの地点であつた。

そして熱線が空中でオレンジの魔力で作られた弾丸がぶつかり弾ける光景。

デュオは瞬時に理解する。

この正確な射撃の出来る人間が身近にいて、この凄まじい援護射撃をする一人の少女がもうすでに空になりつつある魔力を絞り出し自分の援護をしていることを。

『さつさと・・・決めちゃいなさい！アンタら前衛のバックアップがこつちの仕事なのよ。遠くからアンタを狙う熱線を撃つのは難しかったけど、近距離から狙われてるアンタを援護するのくらい楽勝でやってあげるわ！』

デュオの頭に直接叩きつけられる言葉にデュオの顔に笑みが現れていた。

どうやら相手はいつの間にかこちらに移動してきていたらしい。

二重の囃作戦といったところなのだろう。

相変わらず恐ろしく頭の回転が早い相手に思わず溜め息をつき苦笑いするデュオ。

だがこれでいいのだろう。

彼女が頭を使う分自分が体を使う。

一応バランスは取れている。

そう思いながらデュオはターゲットの下へと駆け出した。

ティアナの射撃に援護されたデュオを狙撃系統の攻撃をしかけるターゲットごときが止められるわけもなくビルの中へ簡単に侵入するデュオ。

階段を駆け上がり扉を文字通り蹴破り、居合い抜きのようにビームサーベルを抜きターゲットへ一閃。

だが思いの外ターゲットの装甲は厚かった。

大きな傷はつけられたのだが機能停止とまではいかなかったのだ。

「やべっ、一撃でやれないなんて考えてなかったからな・・・というかコイツ至近距離でも攻撃可能なのかよ！」

連射される熱線をひたすら回避するデュオであったが回避ばかりしていてもターゲットは破壊出来ない、しかし攻撃しようにもターゲットの攻撃が激しくどうにも攻撃出来ずにいた。

そんな八方塞がりの状況のなか、一人静かに動くものがいた。ティアナだ。

アンカーガンというティアナが自作した簡易型ストレージデバイスに搭載されたアンカーを使い壁面を駆け上がったのだ。

そしてデュオを狙い続けるターゲットであったがアンカーの巻き上げられる音に気づいたらしく銃口をティアナが現れるであろう窓側に向けた瞬間、ティアナが窓ガラスを突き破り現れた。

銃口に魔力が充填されていく様を見てティアナはニヤリと笑う。

「銃使いの弱点は銃使いが一番知ってるのよ？」
ティアナはそう言いアンカーをターゲット上部に設置された銃口に射出する。

ターゲットが熱線を撃つ瞬間に先端が銃口を塞いだことにより銃身内で魔力が爆発し銃口及び発射機構がグシャグシャになったターゲット。

そう、銃とは何かが詰まった状態で発砲しようとするすると暴発してしまふものなのだ。

玉詰まりした時撃たないのもこういう理由があるからであり、もし仮に撃ってしまった場合腕が吹き飛んでもおかしくないほどの爆発力があるのだ。

しかしそれでもターゲットは停止していなかった。

たかが攻撃手段が無くなった程度では壊れないということか。

だが忘れてはいけない。

ここで戦っているのはティアナ一人ではないのだ。

ターゲットがティアナに気を取られ猛攻から解放されたデュオがまだ健在しているのだ。

「これで、終わりだあっ！」

ターゲットの近くに駆け寄ったデュオは自分が切り裂いた断面に手を掛けターゲットを無理矢理二分割していった。

やがて完全に二分割し終わった頃にはターゲットは完全に沈黙し破壊されていた。

「ティアナ、残り時間は？」

デュオが訊ねる。

「残り三分！走ればギリギリ間に合うはずよ！」

「ならさっさと行くぜ？掴まっとけよ！」

ティアナが答えるとすぐさまデュオはティアナの太ももと背中に手

を回し抱きかかえる。
俗に言うお姫様抱っこである。

「えっ？ちよっ！？恥ずかしいから止めなさい・・・って・・・きやあああああつ！！？」

さすがのティアナもこれは恥ずかしらしく激しい抵抗を見せるがデュオは完全に無視してビルから飛び降りた。

少なくとも20mはある高さから飛び降りたことにティアナは絶叫するがデュオは至って平気そうだった。

地上まであとわずかというところでデュオはブースターをふかし、ゆっくり地上に降り立ちそのままブースターをふかし続け地上を爆走する。

ブースターにかなり負担が掛かるこの行為ではあるが残り時間があまり無いことを考えると後のダメージはデュオは気にならなかった。

爆走する中羞恥心と怒りから我を忘れかけているティアナであったが小型ターゲットを破壊する程度の冷静さはあるらしく、道中にあつたターゲットは全て破壊し尽くしていた。

そしてデュオはここでもデュオは忘れていた。

止まることを。

二人は猛スピードを維持したままゴールへと一直線に駆け抜ける。

それを見ていたなのはは感情の籠もらない声で魔法発動をレイジングハートに命令した。

「アクティブガードにホールディングネット、デュオくんにはおまけでレストリクトロック、お願いね？レイジングハート。」

それを快く承諾したレイジングハートにより残り一秒のところでゴールにむちゃくちゃなスピードで突っ込んできた二人は止められ、試験管のラインに怒られていた。

そして・・・運命の再会を果たす者が二人、片方は昔なのはに助けを貰ったスバル。

片方は・・・

「相変わらず五月蠅くしているようだな、デュオ。」
ヒイロと

「は・・・？つて・・・なんでお前までこっちにいるんだよ・・・？ヒイロ！！！」

デュオである。

再会（後書き）

そういえば皆さんの言っていたアクセスとはPVのことだったんですね。

今までどっちか分からなかっただけにちょっとびっくりです。

アクセス事態は今7万くらいでして、Wやなのはの力は偉大だなあと痛感しております。

尚次回からは訓練校編になります。

軽い話にしていくつもりですので次回もよろしくお願いします。

ではまた。

会合（前書き）

更新が凄まじく遅くなり申し訳ありませんでした。

実は先月の更新から5日ほど経った頃から仕事の合宿に行ってたので更新できませんでした。

携帯通じない山奥とか、もう行きたくないと思いましたね。

尚今回からは訓練校編となります。

最初こそコミックなどに従いますが中程？からはアナザーワールドへと巻き込みますのでご了承下さい。

また今回の更新ではW達の説明は出来ていませんが、次回の更新に回しているのでご心配なく。

会合

なのはのバインドに縛り上げられながら叫ぶデュオ、そしてそれを全く気にしないでヒイロは口を開いた。

「何故だと？理由は単純だ。単にこの世界に迷い込んだ挙げ句帰ることが出来ないから帰化している。」

つまり生きる為には食料がいる、食料を得るには基本的に金銭がいる。

だから一番手っ取り早く安定した収入を得られる公務員で、資格さえあれば入局自体はさして難しくもない管理局にいる、ヒイロはそう言っているのだ。

ヒイロの言っていることは間違っていない。

もしも自分の育った土地から離され二度と帰れなくなったとき、その土地に順応出来なければ自然淘汰されてしまうというのはデュオでも分かる。

だがどうにもデュオにはその理由が後からとってつけたようで腑に落ちなかった。

だが何か変なところがあるかというと、それもない。

したがってデュオはヒイロを怪しむことはするがそれを指摘することとは出来なかった。

辺りが静かになり重苦しい空気が流れ、スバルは辺りを見回し拳動不審に、ティアナはキョトンとし状況を把握できないでいた。

そんな中で空から純白のバリアジャケットを着た一人の魔導師が飛んできた。

その魔導師はにこやかに笑いながらヒイロ達の前に立つと二人の人間が即座に反応し残りは困惑したり、黙っていた。

「あ、なのはさん。」

一人はリイン。

もう一人は言わずもがな、デュオである。

デュオの表情はガチガチに固まっていた・・・実は試験前の夜、なのはに無茶だけはしないようにと忠告されていたのだが、たった今、物凄い無茶をした挙げ句なのはの魔法の一つであるホールディングネットや

アクティブガードに助けられることになったからである。

そんなデュオの前になのはが立つ。

「デュオくん、約束したよね？無茶しないって。」

笑顔で言うなのはだが目が笑っていない。

どこかで昔聞いた、笑顔は威嚇の最上級というのはあながち間違いではないのかもしれない。

なのはの問いに対して首を縦に振ることで答えるデュオ。

どうやら極度の緊張が原因で声が上手く出ないようだ。

先ほどから口を開いては閉じている姿は金魚のようであったと後にT氏によって語られることになるその姿を見ていたなのはは密かにバインドの拘束を強めていた。

つまりこれは約束を破ったデュオへのお仕置きである。

そんなやりとりがされているとはつゆ知らず、スバルはフラフ

ラと覚束無い足取りでなのはに近づいていた。

なのはもそれに気づきスバルの方を向き笑いかける。

スバルは命の恩人であり、最も尊敬している人に会えたことで涙腺が限界点を突破し、滂沱の涙を流しながらなのはに抱きついた。

なのはもその行為を甘んじて受け入れ優しくスバルの頭を撫で、バインドで締め上げられ制裁を下されて苦しむデュオをよそに、ここに命を救った者と救われた者との感動の再会が果たされたのだった。

それから数十分が経ち、場所は臨海第8空港近隣の廃棄都市街から移り変わって試験会場近くに存在する管理局施設内のロビー。

そこにはデュオとヒイロ、ティアナとスバルがソファアに腰を掛け試験の結果待ちをしていた。

30分程そこで待っていると茶髪を短く切りそろえた小柄な女性と長い金髪と背が高い女性がデュオ達の前に設けられたらソファアに腰掛けた。

その二人の顔を見た四人の反応は様々であった。

まずヒイロは無反応、デュオはゲツとでも言いたげな表情をし、ティアナが即座に立ち上がり敬礼をし、スバルがそれに少し遅れてならう。

そしてヒイロとデュオも形式的に敬礼を済ませると、その二人は苦笑しながら座るように促す。

「あゝ、そんな畏まらんでええんよ？あたしらが君らに用事があったきたわけやし。」

苦笑いするその女性には雑誌などにも載るような美少女で実力も高い八神はやて二等陸佐、一介の管理局員からすれば雲の上の存在であ

る。

更にその隣には管理局でも1、2を争う美貌と非常に高い能力をもち、雑誌などでもよく紹介されるフェイト・T・ハラウン執務官、階級こそないが実質、一尉相当の階級である人間が目の前に突然現れて座れば一部を除けば誰だって驚くものだ。

したがってティアナの反応が当たり前であり、ヒロやデュオの反応が異常なのである。

「了解しました。失礼します。」

ティアナが四人を代表して発言し、敬礼を解きソファアに座る。はやてはそれに満足したらしく、首を何時縦に振り微笑んだ。

「あ、君らに用事うちゅうのはな実は今度あたしが立ち上げる部隊に来んか？うちゅう勧誘をしにきたんよ。」

あまりに唐突な勧誘にティアナとスバルの思考が停止する。だが、

「了解した。そちらが俺を必要とするならば協力する。」

「俺は構わないぜえ？」

もう二人は違った。

そもそもデュオに関しては初めから新部隊のメンバーとして組み込まれている。

ヒロは労働する場所は選ばないというだけだろう。

彼からすればどこも大差はないのだ。

「ありがとつな、ああ、二人の返事はまだええからな？ゆっくり考えて決めたらええからな？」

優しく言うはやて。

その言葉を聞きティアナとスバルは敬礼をし応えた。

そうしていると奥の方からなのはとリインがやってきた。

「お話中かな？」

なのはが聞きながらはやての隣に座る。

「いまちようど終わったとこやで、なのはちゃん。」

はやてが微笑みながら答えるとなのはは頷いてヒロ達を見る。

「それじゃあ早速試験結果の発表するね？まずヒロ二等陸士、スバル二等陸士の二人んだけど特に上げる問題は無かったんだけど・・ヒロ二等陸士、あの砲撃を市街地で使うのはちょっと減点かな。」

なのはの言う砲撃とは、ヒロが先行して大群となっていたターゲットを破壊した際に使ったものである。

地面に大きなクレーターを残すような威力の砲撃を市街地で撃つ行為はどうやら危険行為とみなされ減点対象になるようだ。

「あの時、最も有効だったから使った。もしも一体ずつターゲットを破壊しようものなら囲まれ撃墜判定が下ったはずだ。それにあの場にあつたターゲットが全て破壊指定なのはウイングが確認済みだ、問題はないはずだ。」

そしてなのはの判断を否定するヒロ。

数秒間二人は視線を合わせていたが、なのはが笑ったことでようやく視線が外れた。

「そっか・・ちゃんと安全確認はしてたんだね？ならこの減点は無しね。で、話は少しズレちゃったんだけど、二人共文句なしで合格だよ。」

なのはの言葉を聞き二人は敬礼をした。

「で、ティアナ二等陸士とデュオ二等陸士の結果なんだけど・・・危険行為が多々目に付いたね、特に最後のは見過ごせるレベルを超えてた。だから今回は不合格。」

その瞬間、ティアナとデュオは落ち込むが敬礼をしてその意を了承し互いに次こそはと意気込んでいると、なのはが再び口を開いた。

「不合格・・・なんだけど・・・二人の技量は既にCランクの域を超えてて、半年間もの間そのままにしておくのはかえって危険っていうのが私と試験官の共通見解。」

「ですう。」

なのはとラインが笑顔で話す。

「で、そんなわけだから二人には特別講習を受けて貰おうかなあと思ってたんだ。」

なのはの言う特別講習というのは一週間、魔法の基礎から安全と危険までをみっちり教え込まれるというものであり、この講習をしつかり受けた者には半年待たずにすぐ再試験を受けることができるようになるというある種の救済システムである。

しかし、この特別講習は教官からの推薦状が必須であるうえに、なかなか推薦状は出されないことで有名なため年に数人出るか出ないかというもので、これを受けられるのは非常に珍しいことなのだ。

ましてや高町なのは直々の推薦状など未だかつて出たことなどないだろう。

そんな人物から推薦状を出されたティアナの反応は凄かった。

思い切り固まった挙げ句、真っ青になりながらも興奮を隠しきれて

おらず感激のあまり僅かに涙まで目の端に溜めていた。
器用なものである。

対してデュオは、絶対次は受からなかったらマズいな・・・具体的に俺の命とか命とか命とかが。
などと考えていた。

因みにその時のデュオを見ていたなのは表情は悪魔のようであったことをデュオは知らない。

その後、なのはにより解散と告げられヒロ、スバル、ティアナ、デュオの四人は施設内の一角にあった
芝生に座ったり寝転がっていた。

「そつえばヒロ、あんた、デュオと知り合いなのね？」
寝転んだままティアナがヒロに話しかける。

「知り合いも知り合い、はつきり言つて腐れ縁に近いものがあるな。」
デュオが答える。

「てことは・・・デュオも次元漂流者？」
スバルが聞く。

「ああ。最初こっちに飛ばされた時は大変だったぜ？いろいろとなそれよりお前らヒロと知り合いなんだな。どれくらい前からなんだ？」

デュオがずっと疑問に思っていたことを口にする。

「ええ、知り合いよ。確か私が出会ったのが72年の6月、訓練校に入学した日に会ったのがはじめね。スバル、あんたは？」

「私？私はその年の2月に会ったのがはじめで。」

ティアナの問いにスバルが答えた事実にはティアナは目を丸くする。

「そんな早く会ってたの！？」

ティアナが叫ぶ。

あまりの声量にスバルは耳を塞ぎ、周りにいた局員は何だ何だと四人を見つめ、ティアナは自分のしたことに恥ずかしくなり俯いてしまった。

数分もしていると周りの奇異の眼差しもなくなりティアナも落ち着いてらしく、再びスバルに話しかけようとするが、それよりも早くスバルが話し始めた。

「確か一番始めに会った時は……」

——そう、あの日だった……

せいっ！とおっ！はああっ！！

可愛らしい掛け声が聞こえる。

掛け声は可愛らしいのだが、それに続いて発生する音が異常だった。ズンッ、ドスッ、ドゴオオオッ！！！！

爆音のごとく発生する打撃音の発生源、それは、ある家に設けられたら小さなトレーニングルームにあるサンドバックからであった。

そこまでは普通である。

だがサンドバックを叩く人物が異常であった。

それはまだ少女であり、腕も細くしなやか、とても腕力など存在しそうにない細腕をした少女であるからだ。

その少女がサンドバックを叩く度に爆音が室内に響き、異常な世界を作り出していた。

「おおーい、スバル、もう直ぐ飯だからさっさと風呂に入って汗流してきたらどうだ。」

そんな異常な世界に一人の男性が現れた。

「あ、うん。じゃあ先に汗を流してからすぐいくよ、お父さん。」

そう、その少女こそヒロと共に試験を受けた少女、スバルである。

スバルは自分の部屋へ着替えを取りに戻ろうと階段に足を掛けた瞬間、大きな振動が起こり家を揺るがした。

「っとと、じ、地震？地震なんて珍しいね・・・。」

スバルは一人呟く。

地震はわりとすぐに収まりスバルが再び階段を登ろうとした時、異変は起きた。

ドゴオオー！ドブン

何かが何かを壊し、水に落ちたような音がする。

音源はどうやら自分の家の風呂場らしく、スバルは急いで風呂場へ向かう。

するとそこには

「・・・綺麗・・・」

風呂場の壁に大穴を開け湯船に半身を沈め気絶した茶色い髪の小柄な美少年、ヒイロ・ユイがいた。

ヒイロはすぐに目を覚ましたが、先ほど壁に叩きつけられた衝撃が意外と強かったらしく、フラフラと覚束無い足取りで立ち上がる。スバルはハッと我に返った。

危なっかしい足取りの少年をそのままにしておくことはスバルにはできないのか、急いでヒイロに近寄り肩を貸す。

するとヒイロは一瞬だけスバルを見て再び気絶してしまった。

スバルがヒイロを必死に起こそうとするがヒイロは目覚めることはなかった。

少しすると白髪に体格の良い温厚そうな雰囲気をもつスバルの父、ゲンヤとスバルによく似た顔に長い青髪をもつスバルの姉、ギンガが風呂場に現れ、スバルが事の次第を二人に説明し、とりあえずヒ

イロを病院に運ぶこととなった。

ヒイロがスバルの家から病院に移送されて3日が経った。
だがヒイロが目覚める兆しは無かった。

スーッパタン

静寂に包まれた病室に小さな音が生まれる。ドアが開き閉まる音だ。
医師だろうか？

そもそもこの病室のドアが開くことは本当に少ない。

1日に三回ほど医師が点滴を変えに訪れる以外にはほとんど開かれることはないからだ。

だが今病室に入った人間の容姿はどうみても医師のソレではなく、
どこにでもある一般的な洋服を着た少女であった。

少女はヒイロの眠るベッドの横まで歩き、近くにある花瓶に花を挿し、椅子を持ってきて座った。

「こんにちは、まだ目は覚めないみたいね？スバルがあなたのことを
凄く心配しているの・・・できたら早く目を覚ましてあげてね？
・・・」

少女はヒイロの手をソッと握り語りかける。

この少女は、ヒイロが病院に移送されてからスバルと一緒に毎日見
舞いに来ており、そのたびにこうして話しかけていた。

反応こそ示さないが、この言葉が必ず届いていると少女は信じて繰
り返してきた。

だが今日も目覚める兆しは見えず、諦めて帰ろうとした時、異変が

起きた。

ウツと小さな呻き声をヒイロが出したのだ。
少女はヒイロの手を優しく握りしめ見守る。

すると、ゆつくりとだがヒイロの目が開き始め、意識が戻り、目覚めようとし始めていた。

それから5分程すると、ヒイロの意識は完全に覚醒したらしく、自力で身体を起こしベッドに座っていた。

ヒイロが現状を把握するために頭をフル回転させていると、医師とスバルが病室に入ってきた。

医師とスバルの息が少し上がっていることから、走ってきたことが伺える。

・・・病院内を走ってよいのだろうか、という思いがヒイロの中に生まれたが、ひとまずそれは置いておくことにした。

「き、君・・・どうやら目が覚めたようだね？簡単な問診をしたいのだがいいかね？」

医師がヒイロの居るベッドに近づき訊ねると、ヒイロは首を縦に振り肯定の意志を示した。

そうして問診が終わると医師は病室から退室していった。
残された三人はスバルの意見により、取り敢えず自己紹介をするこ
とになった。

「私はスバル、スバル・ナカジマ。」
スバルが控え目な声量で、しかし元気よく名前を名乗る。

「で、私はスバルの姉のギンガ。」

スバルに続いてギンガも名乗りを上げた。

スバルとギンガはヒイロをじっと見つめる。

ヒイロはその眼差しに小さなため息をもらし小さく呟く。

「ヒイロ・・・ユイだ。」

ミッドチルダに来る以前、UC世界では名前を偽ったりもしたが、この場でそれは無用と判断しヒイロは自分の名前を素直に名乗る。

「ヒイロ・ユイだね？よろしく、ヒイロ！」

スバルがヒイロの手を強引に握り、握手をする。

さすがのヒイロもこれには驚いたらしく僅かに表情が変わった。

・・・微妙過ぎてデユオ達ぐらいにしか分からない程度の変化だったが・・・。

スバルが嬉しそうにヒイロの手を握ったままブンと上下に手を振るものだからヒイロは身体が前後に振られ、少しばかり眉を顰めるその光景にギンガは思わず破顔するが、すぐ真面目な表情になり、いまだ手を振り続ける己の妹の手を右手で抑え離させる。

スバルも姉の表情の変化に気づき、ヒイロの手を離しギンガが使っていた椅子に座り、ことの次第を見守ることにしたようだ。

「すみませんがヒイロさん、今あなたが置かれている状況なんですけど・・・恐らく次元漂流者、つまり世界を跨いだ迷子ですね。それになると思います。」

ギンガの話す内容にヒイロの顔は今までの無表情から一変し、何を言っているのか分からない・・・いや、分かっているが理解した

くないというような表情を見せた。

「信じられないかもしれませんが、少なくともあなたの遺伝子を使ってミッド内を調査してもあなたと合致する遺伝子情報は存在しないという結果が出ていますからほぼ間違いありません。」

ギンガが真剣な眼差しでヒイロを見つめながら話していると、そのうちヒイロが何かを考えるかのように顎に手を当て少し下を向いてブツブツ呟いていた。

その呟きはあまりに小さな声であつたため、ギンガやスバルにはあまり聞き取れなかったが、ある単語だけはギンガには聞き取ることができた。

それは『任務』……この単語の示す意味が何なのかこのときの彼女には分からなかった。

暫くしてヒイロが顔を上げギンガをじっと見つめた。

自分の今後が気になるのだろうか？ そう思い口を開こうとした矢先、ヒイロが口を開いた。

「ここには軍隊のようなものはあるか？」

「あ、ありますけど……。」

ギンガが答えるとヒイロは間髪入れずに再び話し出した。

「そうか……なら俺はそこで働く。」

それを聞いたギンガはギョツとした表情を見せながら話しかける。

「ま、まだ帰れないと決まったわけじゃありませんし、最低限、生活の保証はしますよ?」

そう、管理局では稀に現れる次元漂流者に、自分の世界に戻る日までは生活の保証をする義務があり、働く必要は無いのだ。無論、働けないわけではないし、帰化することも可能だが、その道を選ぶ者は非常に少ない。

それはそうだろう。

誰だって自分がいた世界が一番落ち着くのだ。

それなのにヒイロは頑なに「働く」と言っただけで聞かず、ギンガが渋々折れて終わった。

「・・・いつまでも入院しているわけにはいかないだろう。俺はどこに行けばいい?」

ヒイロの話す内容にスバルとギンガはキョトンとしてしまう。

どうやらまだ決まっていないうだ。

ギンガが唸りながら必死に考える中、スバルの頭上に電球が現れ輝いた。

何か閃いたようだ。

だが、何故だろうか・・・嫌な予感しかしない。

「行く場所がないなら、うちに來たらいいんだよ!」

やはりろくでもない閃きだった。

いくら次元漂流者といえども、相手は男性である。

少女二人と父親一人しかいない家に招き入れ住まわせ、何か間違いが起これないとも限らない。

そう考えるとギンガとしては遠慮願いたいのだ。

だがギンガの願いは儚く散るのだった。

何故ならばヒロがスバルの提案に即答でイエスを出したからだ。

ギンガは落ち込んだ。

それはもうあからさまに。

だがヒロとスバルは気にしなかった。

ギンガが見えていないのだろうか？

ギンガが一人、部屋の片隅で膝を抱えいじけるなか、話はドンドン進んでいった。

まずスバルが父を電話で呼び出し、勤務中であるにも関わらず僅か5分でその場に駆けつけてきた。

そしてヒロが目覚めてからのことを包み隠さず全て話した。

ギンガは父ならばスバルの考えを却下してくれると思ったが、父ゲンヤは豪快な笑い声を上げ二つ返事で了承してしまった。

再び落ち込むギンガをほうっておいてスバル、ゲンヤ、ヒロは退院手続きを済ませ病院を後にする。

病室に一人残されたギンガを見つけた医師は後にこう語った。

「え？ああ、あの時のお嬢さん？そうだねえ・・・リアルでヤンデシを見れるとは思わなかったね。」と、語ったそうなの・・・。

その頃ギンガを放置したゲンヤ一行は管理局地上本部内の一角に設けられた次元漂流者が住民票などを作成してもらったために必要な手続きをしてくれる漂流処理情報登録窓口なる部署にやってきていた。

普段この部署は閑古鳥も逃げ出す忙しさで有名な管理局の中で唯一閑古鳥が無く部署とされるほど暇であるため、ヒイロの情報登録処理はわりとすぐ終わった。

終わったのだが、身分証明書の発行に時間がかかっていた。身分証明書の発行には本局所属の将官クラスの許可がいるのだが、将官クラスとなると通常の局員の10倍以上の仕事をしているためなかなか話を取り次げないのだ。

そして登録が済んでから二時間以上が経過したところ、一枚のFAXが送られてきた。

内容は至って簡素なもので、身分証明書の発行を許可、となっており、その下に将官クラス三名の実印が押されているというものだった。

ゲンヤははつきり言って呆れていた。

たかが紙一枚出すのに二時間も掛かる管理局の対応の遅さに。

呆れてはいるが、それでもなんとか一日以内に発行できるだけマシかと考え、頭を振って思考を切り替える。

「んじゃ、身分証明書も手に入れたんだ。取り敢えず生活に必要な物をギンガとスバルと一緒に揃えてきな。」

ゲンヤが次元漂流者に渡される生活補助金の入金されたマネーカードをヒイロに手渡す。

ヒイロがそれを懐になおすと、幽鬼の如き足取りで現れたギンガに腕を掴まれ拉致された。

これにはさすがのゲンヤもポカーンと間抜けな表情になってしまい、開いた口が閉まらないようだ。

スバルも最初は呆気にとられてしまったが、直ぐに姉の跡を追って走りだした。

ゲンヤは少しの間呆けていたが、少しすると頭を掻いて苦笑いしながら仕事へと戻っていった。

そして4ヶ月の時は流れ、身体つきが少し大人っぽくなったスバルとヒイロは管理局陸士訓練校に入学した。

「二人部屋のルームメイトは当面のコンビパートナーでもある。試験と面接の結果から選ばれた組み合わせだ、円滑に過ごせるよう努力するように。」

訓練校所属の局員、つまり教官が校内放送を流した。

「えーと、あたしは……」

スバルが掲示板に表示された情報の中から自分の名前を見つけようと文字を流し読みする。

「「（あ、あった）32号室……」」

スバルと一人の少女の眩きが被った。
二人の視線が絡み合う。

どうやら思考が直ぐに働かなかったようで、少しの間が開いた。

「32号室？」

明るい茶色の髪をツインテールにし、鋭い眼差しをした少女が今一度確認すると、スバルは少し慌てながら肯定した。
そして頭を下げ挨拶をする。

「私、スバル・ナカジマ12歳です！今日からルームメイトでコンビですね！よろしくお願いしますっ！」

スバルが元気よく挨拶をするが少女の方は何の感情も籠もらない、無機質な声で返した。

「正式な班とコンビ分けまでの仮コンビだけだね。ティアナ・ランスター13歳・・・よろしく。」

ティアナと名乗った少女は自分に割り当てられた部屋に向かうため歩き出した。

「荷物置いて着替えて行こう。準備運動、しっかりやりたいから。」
そう言って部屋へ向かうティアナ。

そんなティアナをみで見惚れてじっと見てしまうスバルだったが、ティアナに睨まれてしまい萎縮しながら用があるわけではない旨を伝えると、ティアナは再び歩き出した。

「・・・あと、立場は対等なんだから丁寧語じゃなくていいわよ。」
ふと思い出したかのように付け加えられた一言にスバルが目を輝かせ嬉々とした表情で頷き、部屋へ向かうのだった。

会合（後書き）

デ「さあ、久しぶりにやってまいりましたあとがき暴走タイムー！」

ドンドンドンパフパフ

デ「効果音が古いかかそういうのは気にしないように。んじゃま、取り敢えず始めるか。」

ティ「・・・そういえばこのあとがきコーナーって出る条件があるって聞いているんだけど・・・」
デ「ああ、まああるぜ？　つつてもほとんど問題ないだろうけどな？」

ティ「ふうーん・・・で、どんなの？」

デ「テイルズオブシリーズに出てるか否かだ。」
ティ「ああ、アレね。確かに問題は・・・あ。」
デ「ティアナも気づいたようだな？　そう、この決定にある問題、それは・・・」

——主役のなのはさんが出られないことだ。

フェ「なのはーっ！！」
ティ「ちょ、フェイトさん、キャラ違っ・・・って何をするやめ・・・」

——チーン

フェ「あ……。」

デ「やっちゃったか……。ま、そんなことより今回からは訓練校つてことらしいな……。また俺達の影は薄くなるみたいだな……。」

ヒ「次回、白鬼に」

全員「テイク・オフ！」

デ「……。どっから湧いたんだよ。」

テイ「気にしたら負けなのよ、きっと」

モバイルデバイス（前書き）

今回は短め。

というか説明口調なのが気になりますorz

次回の話からはいつものアナザーストーム発動していくので今回は仕方ないということですのでお願いします（泣

モバイルデバイス

ズウウウン……

ティアナとスバルが着替え終わり訓練場に向かうと、そこは凄まじく重たい空気に包まれ、他の訓練生達の様子が変だった。

……主に男子の様子が、だが。

不思議に思いティアナが訓練場を見渡すと、意気消沈した男子の中にありながら一人平然としているのがいた。

その男子の容姿を見た瞬間、この空気の発生した原因が容易に想像ができた。

男子訓練生を見渡せばちらほら男前の者はいる。

だが彼と比べると月と蠶、そう例えられるほど段違いの存在なのだ。

まず目を惹くのは小柄な体型だ。

この細く、触れば折れてしまいそうな身体を見ると、加護欲を掻き立てられる。

しかし、決して弱々しさを感じさせないのは無駄な贅肉を削ぎ落とし、無駄なく引き締められたら筋肉の存在があるからだろう。

そして極めつけはアイドル顔負けの美しさだ。

きりつとしたその眼差しは恋愛に興味のない人間でも少しドキツとしてしまうだろうし、普通の女子ならば整った顔立ちにクラツとしてしまうだろう。

はつきり言って規格外だった。
比べるだけ無駄だと思う。

だがティアナはそこいらの女子と同じような状態にはならなかった。むしろ、見てくれが良いだけの浮いてるやつという判断を下し脳内の隅へ押し退けた。

そして頭上にクエスチョンマークを浮かべ、状況を理解出来ていないスバルの首根っこを掴んで訓練場の奥まで行き、教官より事前に指定された場所へ行き列に並んだ。

ほどなくして全員がきちんと整列し終わり、数分待つと教官がやってきた。

だが今まで凜々しい表情のままでいた一人の男子の表情が豹変した。

具体的には何故ここにいる、といったように。

教官が生徒たちの前に立ち、スツと背筋を伸ばした瞬間、空気が変わった。

まるで歴戦の勇士が放つような威風堂々とした態度に聡明でしなやかで華奢な体つきでいながら弱々しさを全く感じさせないその女性教官が生徒たちを見回すだけで二名の生徒を除いて全員が竦み上がった。

恐るべき威圧感、まるで王に仕える騎士のようである。

「私はルクレツィア・ノイン陸曹長である。本日より君たちの教官として最低一年は関わることになる。まず、訓練に入る前にちよつとした講座を始める。全員その場に座れ。」

見た目麗しく、別名鬼教官の異名をもつ彼女こそが長年ガンダムパイロットと関わり、幾多の死線を潜り抜けてきた歴戦の勇士の一人、ルクレツィア・ノインその人である。

ノインの指示に従いその場に座る生徒たち。

その光景を見ながら彼女は空間モニターを展開し、三枚のディスプレイを大きく表示した。

「まず、魔法は大きく分けて3つあったのは知っているな？」

一番ポピュラーで使い手が多いのが、ミッド式の魔法であり、足を止めての繊細なコントロールで魔力スフィアを操ったり、一撃一撃が強力で遠距離まで攻撃できる砲撃を撃ち込んだりするのが特徴だな。傷つけずに制圧するというのが一番の主旨である。

次に近代ベルカ式だが、こちらは移動しながら細かな攻撃や近距離戦闘による打撃を中心としたものになるのは知っているな？

こちらにも傷つけずに制圧ということが主旨であるため、砲撃などが存在するが飛距離は期待できない場合が多い。

しかし、身体強化の魔法に特化している者が多い近代ベルカ式魔法の使い手にとっては些細な問題であることは覚えておくように。

最後に古代ベルカ式魔法、これは近代ベルカ式に似てはいるが主旨が全く違う。

古代ベルカ式の主旨は1対1戦闘における勝利を主旨としているため、個人の才能などに左右される魔法のためいまでは使い手がほとんどいない希少な魔法である。

更にここには近代ハイブリッド式ベルカ魔法やベルカ&ミッドのハイブリッド式魔法などが存在するが今は置いておく。

また、それぞれの魔法使いに合ったデバイスはこれだ。」

今まで開いていたディスプレイを消して新たに5つのディスプレイを展開するノイン。

「インテリジェントデバイスはミッド、ストレージデバイスが全魔

法に対応、アームドデバイスがベルカ、ユニゾンデバイスはベルカ、ブーストデバイスが全魔法に対応する。

どのデバイスがどんな魔法に特化しているかは基礎中の基礎であるため割愛させてもらう。今までのところで質問は？」

生徒たちを見回していると一人、挙手する者がいた。

「発言を許可する、名前と内容を。」

「はい、ティアナ・ランスターであります、先ほどの話なのですが基礎中の基礎というのは最初にあつた話もそうであると思うのですが何故話をしたのでしょうか？」

ティアナが直立不動の姿勢を取り言つと、数人の生徒が頷いて同意見であることが伺えた。

それを聞いたノインはふつと笑った。

「確かに最初の話も基礎中の基礎だ。だがこのあと説明するモバイルデバイスやデバイスヒューマンについて話すのに必要だから話した分かったか？」

ノインの問いにティアナは頷き、座るように指示され直ぐに座った。

「いま言ったように、ここ数年で現れた新しいデバイス、これがモバイルデバイスである。」

ノインが白い水晶のついた首飾りを取り出してみせる。

「待機状態の見た目はインテリジェントデバイスのようなもので簡単に持ち運びできる。

更にこれを展開すると」

空間モニターの一つに動画を映し出す。

するとそこには無骨なデザインだが、力強く見える一体のロボットのような見かけになった人間がいた。

「モビルジャケットとなり、通常形態、つまり顔などの部分的な露出がある状態では魔導士や騎士と対して能力は変わらない。だがモビルジャケットはオーバーモードという全ての装甲展開時の能力は単体でA A以上の能力を持っている。なお、モビルジャケットをオーバーモードに移行した際は、通常の人間が突入できない高温地帯などに突入することが可能になるなど、様々な利点を持っている。ここまでで質問はないか？」

再び問いかけるノイン、そして再び挙手するティアナ。

「ランスター訓練生、発言を許可する。」

「ありがとうございます。先ほどの話を聞く限りモビルデバイスやモビルジャケットには利点しかないように思えるのですが。」

そう、ティアナの思うことは誰もが思うことだ。

オーバーモードになっているだけで最低でもA Aクラス的能力は約束され、通常では出来ないことができるようになると聞けば誰でもモビルデバイスを手にしたいと思うものだ。

だが実際は違うことを訓練生たちが騒ぎ出す前にノインが説明し始める。

「確かに利点ばかりで欠点が無いように見えるモビルデバイスだが、実際は欠点が多く、扱いの難しいものというのが本当のところだ。まず、モビルデバイスはインテリジェントデバイス以上に複雑な構造のために、専門の技師でなければ正しい整備が出来ない。

これは一番大きな問題だ。

もしも技師が倒れてしまえば、モビルデバイスはいつか整備不良により自爆してしまいかねない。

更に金属疲労により装甲が脆くなる恐れもある。

次に問題となるのが扱いにくさだ。

モビルデバイスを起動させモビルジャケットを展開するくらいなら誰でもできることだが、そこから先の動きまわったり戦闘機動を行うことが難しい。

なぜならモビルジャケット展開時は自分の身体を動かすのではなく、一つの機械を動かす感覚を持たなければならない。

単に歩こうと右足を前に出せば転ぶことになる。

自分が歩くと考えずに、機体の右足を前に出し、全体のバランスを保ちながら前進を行わなければならないからだ。

この、意識の分別が出来なければモビルジャケットは操れない。

また、オーバーモードのモビルジャケットは最高速度なども段違いだからな。

大きなGに慣れていないと全身粉碎骨折か複雑骨折のどちらかが待ち受けている。

他にもレーダーの読み方やブースターの切り替えなども難しいため、モビルデバイスを扱う者は希少な存在となっている。」

開いていたディスプレイを全て消し生徒の様子を伺うノイン。

生徒たちはモビルデバイスへの憧れを持ってはいるようではあったが扱いたいと思うものは居ないことがノインには分かった。

少しの張り合いもない生徒たちに呆れながら閉講を宣言しようとした瞬間、一人拳手するものが現れた。

それは今まで黙っていたスバルであった。

「ノイン教官、デバイスヒューマンというのは一体・・・？」

尻すばみになりながら話すスバル。

それに対してノインは発言の許可はまだしていない、とスバルに注意してから説明を始めた。

「説明に漏れがあったな、すまない。デバイスヒューマンというのはモビルデバイスの人間バージョンだな、平たく言えば。ただ、モビルデバイスの場合は誰でも起動できるがデバイスヒューマンはデバイスヒューマンがマスターを選ぶ。つまり、デバイスヒューマンに認められなければ起動ができないということだ。現在確認されているのは航空魔導士隊から独立したばかりのモビルエアフォース隊を指揮する、トレース・クシュリナーダ少将のデバイスであるトルギスEEだけだったな、記憶では。そろそろ時間だな、以上をもって閉講とする。次は10分後にお待ちかねの訓練だ、遅れるな？」

そう言って立ち去るノイン、さりげなくヒロに合図を送り姿を消した。

そしてヒロも合図に従い姿を消す。

それに気づいた者は誰もいなかった・・・。

モバイルデバイス（後書き）

テ「モバイルジャケット・・・モバイルデバイス・・・これが使えれば私は・・・。」

ス「どうしたの？ランスターさん。」

テ「どうもしないわよ、能天気娘。」

ス「酷っ!？」

テ「酷くない。」

ス「いたっ！バツサリ切られて私の心は砕けた流氷みたいに粉々だよ?!」

テ「うつさい、というかいまいち理解しかねるわ、その表現。」

『・・・必ず強くなってみせる、そしてランスターの弾丸は全てを貫くことを証明してみせる!』

求めるもの 完

訓練×鬼教官（前書き）

連続投稿なんてしてみます。

基本的に訓練校編は短編ぐらい短くなると思います。

訓練×鬼教官

訓練が始まる五分前、ノインとヒロの二人は訓練生たちから離れ話し込んでいた。

「ノイン、お前が来たのはいつだ。」

先ほど訓練生・・・主に男子を絶望の淵へ無自覚で追いやった張本人であるヒロが訊ねると、ノインは一年と答えた。

そしてノインがこちらにくることになった時期がヒロよりも更に後であることが分かった。

彼女が言うには、ノインがガンダムパイロット5人が行方不明となった知らせを聞き、急遽搜索チームを立ち上げ5人を搜索したのが始まりだそうだ。

搜索は難航し、いつしか諦める人が増え始め搜索自体が滞りだしたころに新たな情報が流れ込んできたらしい。

その情報とは二つあり、一つは最後にガンダムパイロット5人のうち三人が居た場所を知っていた人物がおり、コンタクトをとることができたこと。

もう一つはコロニーで各指導者達と地球の実質的なトップとなったリリーナとを繋ぐ重要なパイプであるゼクスが執務中に失踪したとの知らせであった。

その際、封印されていたはずのトルギスIIIIが蒸発してしまっただかのように跡形もなく消えてしまったという報告が共にされた。

ゼクスの性格からして、執務中にどこかに消えることは考えられない。

そして消えたトールギスIEEE・・・この二つの事実がノインの頭の中を駆け巡り、一つの答が首をもたげた。

「まさか・・・神隠しにでもあったというのか・・・！？そんな非現実的なことがあるわけ・・・」

そうは言うものの、何故か否定出来なかった。

コロニーの指導者たちに簡単なアドバイスをし、リリーナに直接話が出来よう話をつけておきノインは自分の愛機であるトールラスSK仕様に乗り込み広大な宇宙へと飛び出した。

幸い、今の指導者たちならばゼクス・・・いや、今はミリアルドだが・・・とにかく、ゼクスの助けを必ずしも必要としないくらいの実力はある。

あとは時間が経てば利口な指導者たちならば勝手に育つ、そう判断したからこそノインは飛び出すことができた。

だがいくら探してもゼクスはおるか、トールギスIEEEの情報すら見つからなかった。

何も見つからず彼ら六人が行方不明になってから三年が経った。すっかり指導者たちとリリーナは代表者として相応しい能力を身につけていた。

ノインがトールラスの中で少しばかり安心して気を抜いた時、異変が起きた。

機体の各メーターが異常を示し、コクピット内も赤いライトに照らされていた。

慌てずに異常を調べるノインだったが原因が全く分からなかった。もしも専門家でなければ分からない部品の故障などということになれば、宇宙で漂流する羽目になる。

ノインは詳しく調べるためにハッチを開こうとするが、ハッチは開

くことはなかった。

そのうち機体が激しい揺れに襲われ、コクピット内を白い光で埋め尽くした。

ノインの意識はそこで途切れていた……。

次に目覚めた時には病院に運び込まれ、ベッドの横にはリンディ・ハラOWN提督が居た。

リンディ提督が語る内容を聞いているうちに、一つの答を思い出した。

「そうか……彼らは神隠しにあったんじゃない……私と同じように他の世界に飛ばされたんだ。」

そう呟くのをリンディ提督は聞いていたらしく、ガンダムパイロット5人とゼクスの搜索が開始された。

そして驚くことに、こちらに流れてきたのが彼らだけでないことが判明した。

何故なら……病室にノインの昔の教え子たちやトレーズといったAC世界の人間が多数押し寄せてきたからだ。

そして自分より年老いた五飛とのコンタクトをとることができた。

そして退院した後、ノインに新たな仕事をトレーズより言い渡された。

その内容こそ、この訓練校の教官を勤めろというものであった。

最初は乗り気ではなかったが、彼からモバイルバースの話聞いて一瞬で決意した。

「分かった。私でよければ教官役を引き受けよう。ただし、私の訓練は厳しい。たとえ中退者が増えても文句は言うなよ?」
久しぶりに笑みが零れるのをノインは感じていた。
教官時代の血が騒ぐのだろう。

こうしてノインは訓練生の鬼教官として今を生きている。
その間に彼女が一流の戦士に育て上げた生徒数は200を超える。
その半数は魔導士であつたため彼らとの繋がりはいまいち薄くはあつたが、卒業後も彼らから連絡がくることからどれほど彼女が信頼されているかが伺えるというものだ。

ノインが話し終わる頃には訓練開始まで残り一分となっていた。

二人は後ほど落ち合う約束をし訓練場へと駆けていった。

そして悪夢の時間が始まつた。

「何をしている!安全確認もできないうちに走り出すな!相方の目を潰すな!視野が狭くなっている!!死にたいのか!!?」
怒声が訓練場に響き渡る。

先ほどからいろいろなペアが怒鳴られ、腕立てをさせられていた。
しかも失敗するたびに倍になるという恐ろしい罰だ。

「ばかもの!戦場でそんなのろくさした動きで生き残れるか!腕立て40!」

また新たな犠牲者が増えた。
鬼教官という噂が本当だということが訓練生はこの一度目の訓練で分かつた。

「ええい！貴様等やる気はあるのか！？ユイ訓練生、手本を見せてやれ！」

さすがのノインも完全にキレていた。

いくら魔法に非殺傷設定があるとはいえ、必ずしも死なないわけではないのだ。

命が掛かっている、それ故にノインは手を抜かない。

彼女の指示に従い所定の位置につくヒイロ。

数人の訓練生がなにやら陰口を叩いている姿が見受けられる。

「ゴー！」

ノインが開始を宣言する。

するとヒイロはまず前方に転がり第一ポイントのコーンに寄り添うように背を向け姿勢を低く保ちながら立ち上がり、左右や前方に危険物がないかを素早く確認。

勢いよく第二ポイントコーンへ向かい安全確認を行いすぐさま第三、第四コーンへ走り、あっという間にフラッグポイントへ到達し全方向に注意しながら相方である少年に合図を出す。

少年はヒイロに前もって出された指示を忠実に守り、だが決して指示を守るだけでなくそれ異常の動きを見せながらフラッグポイントへとたどり着きヒイロと背中合わせになり前後左右をカバーしあう形の陣形を作り上げた。

「貴様等、見たな？これが一つの理想だ。貴様等のろくさした動きでは必ず死ぬことを覚えておけ！」

「……はい！」「……」

訓練生たちはノインの言葉に力強く返事をする。

どうやらヒロたちに負けていたく無いという意識が良い方向に働いてきているようだった。

あれから2ヶ月経った。

訓練生一人一人の質は驚くほど高くなってきているのが分かる。

現に訓練場にノインの怒声が響き渡る回数が目に見えて減っているからだ。

だからといって訓練が優しくなったわけではない。

むしろ苛烈極まりない。

だがそんな中でも怒声が減っているのは彼らのほとんどが10代だからだろう。

若い故に慣れるのが早いのだ。

だが同時に慣れてしまったが故に慢心してしまうこともあるため、ノインの怒声が止むことはなかった。

単に回数が減っただけで、無くならないのにはそういった理由があるからだ。

朝の訓練が終わり、ヘトヘトになった訓練生達は掲示板に表示された情報に騒ぎ出した。

どうやら現時点での成績発表が行われているようだ。

ティアナとスバルも成績を見て色めきたった。

「32号室ナカジマ&ランスター、総合三位だつて！」

スバルが満面の笑みを浮かティアナに話しかける。

「ほんとだ・・・これならトップも狙える！」

ティアナが珍しく笑い、意気込むなか、事件は起こった。

それはどこからか聞こえてきた。

『あの子・・・士官学校も空隊も落ちてるんでしょ？相方はコネ入

局の陸士士官のお嬢だし。』

『格下の陸士部隊ならトップ取れると思ってんじゃない？』

『恥ずかしいのかしらね。』

それはどこにでもいる陰でしか言えない人間の叩く妬みである。

ティアナが声のする方を向くと声はしなくなった。

悔しさから拳を握りしめ訓練生たちを見回す彼女の形をスバルが叩いた。

「ランスターさん、休憩行こう。」

「今の聞こえたでしょ？」スバルの気遣いにすら噛みついてしまうほどティアナは気が立っていた。

だがスバルは気にした様子もなくティアナの手をとり歩き出した。

二人がその場を離れようとしたその時、一人の少年が現れた。

「他人の過去がどうあれ、今彼女らが三位であるのは実力があるからだ。」

そして相方であるナカジマ訓練生がコネ入局である証拠は？」

あらゆる意味で目立つ少年、ヒイロだ。

ヒイロの言葉に黙り込む訓練生たち。

『だけど・・・ナカジマ訓練生が陸士士官のお嬢だからどうした。』
『なのは』

訓練生の一人の言葉が終わらないうちにヒイロはバツサリとそれを切り捨てた。

「たとえ陸士士官の娘だろうがなんだろうが、実力も無い者が上位になれるわけではない。それにお前たちの言い分からすれば俺や俺の相方、第二位の成績を持つ者は皆コネなどを使ったことになるな？だがそれはありえんな。」

俺に繋がりがある士官などいない。次元漂流者だからな。

その俺が一位を取れたのは相方と俺の努力があつてこそだ。

その努力が足りていないお前たちが彼女らを蔑む権利などあるのか？

そもそもそんな下らないことを考える暇があるならもっと実力を高める努力をするんだな。

そのほうがよっぽど建設的で有意義だ。

・・・行くぞ。」

ヒロが珍しく長い時間話したことにヒロの相方は啞然としたが、彼が歩き出すのに合わせて慌てながら着いていった。

まさか違う方向から言い返されるとは思わなかった陰口を叩いた者達は歯を食いしばり密かに悔しがった。

そしてヒロに助けられたら当の本人はというと・・・。

「・・・」

不思議そうな表情をしていた。

スバルはそんなティアナの様子をおかしく思い、何度も呼びかけた
りしたがティアナが反応することはなかった。

訓練×鬼教官（後書き）

ヒイロの相方の名前を募集します。

能力としてはUC世界のパイロットよりは少し劣るくらいですが、十分戦えるレベルの技能を持った14歳の少年です。

彼は訓練校編終了後も、たまにお話の中に登場することになります。なかなか良い名前が思い浮かばないので、よろしければご協力お願いいたします。

休暇（前書き）

お久しぶりです。

更新遅くなりまして申し訳ないです。

休暇

ヒイロノ叱責から数ヶ月が経った。あの叱責の影響かは分からないが、訓練生たちの練度が急激に高まっていった。

上位の者たちに追いつきたいという気持ちがあるが彼らの実力を引き出すきっかけになつたのだらう。そのおかげか、ノインの罵倒に近い叱咤の数も日に日に減っていった。

そして今は各魔導師タイプに分かれて訓練を行う時間が増えてきたことから、彼らの実力が入学当初とは比べ物にならないほど高められたことが伺える。

今の時間はミッド式、ベルカ式を扱う者には至福の時間だろう。なぜなら……

「戦場で足を止めるな！ 足元がお留守になっている、死にたいのか！ ！ 貴様、孤立しているのがわからないのか！」と、ノインな叫ばれた挙句訓練よりもハードなお仕置きを受けることはないからだ。モビルデバイス組には悪いが彼らは非常に訓練が楽しく思える時間だからだ。

そして遠くから聞こえる鬼教官の罵倒を聞きながら彼らは揃って心の中で合掌した。今日も訓練校は平和である。

「では今日の訓練はここまで。尚、週末の休暇中はグラウンド整備が入るので自主練は禁止だ。週末練習組もたまには休むように。以上、解散。」

ノインが訓練の終わりと解散を告げると訓練生たちは自室へと戻っていった。

翌日……

「あたし思うんだ……あんたのその異様なワガママさと強引さだけはみならうべきところがあるって！ ！」

ここはミッドチルダ東部12区内<パークロード>、ティアナの予定ではこんな場所にいるはずではなかった。

ならなぜいるのか・・・それは一重にティアナの前方を歩き、ほめられたと思いきやスバルによって強引に連れてこられたからである。ついつい「こんなはずじゃ無かったのに・・・」と考えてしまうティアナの心は非常に沈んでいた。どこからか「世界はいつだってこんなはずじゃなかったことだらけだよ!」という男の子の「ような女の子のようなよくわからない声が聞こえてきたのをティアナは流しつつ、スバルの後をついていく。

本当に嫌ならばここで帰ってしまえばよいのだが、彼女も満更でもないらしく不満を漏らしながらついていった。

しばらく歩いていると、スバルにソックリな顔立ちに長い髪が特徴的な少女がスバルを呼んだ。どうやら彼女がスバルの姉、ギンガのようだ。

スバルがギンガの呼ぶ声に気づき、駆け寄り手を組み合わせその場で一回転しスパーリングを行った。その体育会系の行為についていけないティアナは一人、呆然と立ち尽くしていた。

それから少ししてから簡単に自己紹介を行った三人は仕事を忘れひと時の平和を堪能していた。

ウィンドウショッピングをしていると不意に一人の少年を発見した。ヒイロである。

ヒイロを知る三人は彼の後を追うように歩いていく。

もちろん三人は気づかれないように移動していつのだが、特殊工作員として育てられたヒイロはそんな彼女らの行動も気づいているのだが、別段見られて困ることをしているわけでもないのほうっておいているだけであり、何事もないかのようにふるまっていた。

町の散策をするヒイロとそれを追う少女三人、はたから見れば三人はストーカーのようにも見えるのだが、三人の少女はまったく気づいていないようだった。

ストーカーのように尾行するのに三人が飽きてきたころ、街が急に慌しい空気に包まれた。

走ってその場から離れていく男性の一人をギンガが捕まえて事情を聞き出してみたところ、どうやら土木作業用にデチューンし、戦闘能力をなくしてあるモビルデバイス<リーオー>を不法に手に入れ改造した男が銀行に立てこもっているようだった。

なぜ一般人がリーオーの改造と不法所持に気づけたのか・・・それはモビルデバイスに組み込んであるシステムのおかげである。

モビルデバイスが悪用された場合、被害が大きくなる恐れがある。そのため管理局が一般に販売許可しているものにはすべて製造の段階に、構造やシステムを無許可で改造したり、届出なしのDNA情報をデバイスが検知された場合紫に、その両方である場合は黒に装甲が変色するようにしこまれているからだ。

もちろんこれは一般人が迅速に避難行動を行えるようにレジアスIIゲイズ中將により一般公開された情報であるため、信頼性も高く、魔法を使えない一般人はすぐさま行動を起こせるようにというレジアスの気遣いを感じた人々は緊急時でも落ち着いて行動していた。通常、こういった状況になったとき一般人は慌てるばかりで正常な判断を下せない場合がほとんどであるため、この状況に開いた口が閉まらない三人ではあったが、すぐさま気を取り直し、避難の誘導を行い始めた。

そうして人質とされた銀行員数名と客数人以外の避難が完了したころには銀行の周りは完全に包囲を完了した首都防衛隊所属のモビルデバイス隊がいた。

数では圧倒的に管理局側が有利なのに彼らは踏み込めないでいた。なぜなら犯人の数は12人、それぞれが手にマシンガンなどの質量兵器を持ち、人質に向けていたからだ。

「人質を殺されたくなければさっさと現金1億もってきな！一時間以内になあ！」

犯人の一人がそう要求する。どうやら金欲しさからの犯行のようだ。もちろん管理局の規模からすれば1億程度の金は用意することぐらいワケないことなのだが、金を渡して人質が開放される保障がない以上要求を呑むことはできない。

犯人一味は下卑た笑みを見せ続けていった。

「そうそう、一時間経つまでただばーと待つてるのは時間の無駄だな・・・幸い人質の八割が女だからな。お前らが金を持つてくるまで楽しませてもらおうか。」犯人のなかの数人がリーオーを待機モードに移行させ一人の少女をその太い丸太のような腕で体を締め付け逃げられないようにし、舌を顔に這わせようと顔を近づけた。誰もがこれから起ころうとしていることを理解し目を反らした。普段、凛々しくも優しい表情を見せ、見た目の美しさから雑誌などに載る機会の多いこの少女も普段の気丈さが消えうせ自身の非力さを嘆いた。

男の舌が触れそうになった瞬間、なぜか男が気絶し少女は解放されていた。

不思議に思い周りを見回してみると、いつの間に現れたのか分らないが、トリコロールカラーのロボットがいた。

そのロボットの存在を見た全員の時が僅かな時間ではあるが確かに止まった。目を丸くし、驚く少女を尻目にロボットは人質をとる一人に高速で近づき、手に持った白い円筒から発生している光で斬りつけ意識を刈り取った。

仲間がやられたことで犯人たちは我に返り、リーオーを起動させ銃口を向けるが犯人らがもつ銃の五倍以上も大きな銃を片手で持ち、銃口を向けられたとたん全員顔を青ざめ武装を解除し投降した。

男らが捕まり、連行される姿を見送ったのちロボットが先ほど捕まえられていた少女の方に顔を向けた。

そのロボットの姿はリーオーに近いものがあるが、その性能差は大きなものであることをなんとなく感じた。ロボットが手を差し出す。

どうやら少女が腰を抜かしていることがわかるようだ。少女はその手を借りて立ち上がる。その身長は自分よりもやや低いくらいか、なのはくらの大きさであり自然とロボットの方が見上げる形となっている。

少女が少しの間見惚れているとロボットがどこかへ飛び去っていつてしまった。

お礼を言う前に立ち去られてしまい呆然としてしまったが、すぐにハッと我に返り近くにいたモビルデバイス隊の一人を呼び止めると、その隊員はガチガチに緊張して敬礼をしていた。

「ご、ご苦労様であります！テストロッサ執務官殿！」

若干裏返っている声は緊張のせいだろう。なにせ管理局の中でも彼女は非常に有名な存在であり、へたなアイドルなどよりも人気があるのだ。

「あ・・・お疲れ様です。そ、それよりさっきの特機はなんなんですか？機動力とかいろいろ異常に高性能でしたと・・・」

フエイトの質問に隊員は首を捻っているところを見ると彼はあのロボットの正体を知らないようだ。

そもそも基本的にあのロボットは訓練校の生徒で無い限りは分からないのである。唯一知っている人物は武装隊の隊長くらいのものであり、あのロボットの正体はまだ一般的には知られていないのが現状である。

フエイトはロボットが飛び去っていった方角を見つめる。その瞳がなにやら熱を帯びていた・・・。

所変わってスバルたちが待ち合わせしていた公園――

「どこの世界でもああいった奴が存在するのか・・・それにあの女・・・なぜリリーナと一瞬とはいえ姿が重なった・・・」

ドンと、公園の塀にこぶしを打ち付ける音がした。その音は酷く弱弱しくきこえた・・・。

休暇（後書き）

今回の話は後々重要なものになります。

この話から本編からは大きく離れた内容になりますので閲覧する際、本編とかぶせて考えると違和感が発生するので気楽に呼んでいただけたらありがたいです。
ではまた。

番外編其の壱 刻の涙（前書き）

はい、お久しぶりです。

久しぶりの更新になってしまい申し訳ありません。

今回書きました番外編はもしもゝがなのは世界に来たら、というもののになります。

っていうかタイトルで何か分かりますか。

いきなり最終回なのでぶっ飛んでますが気にしたら負けなのですよ。

番外編其の壱 刻の涙

瓦礫に埋もれる白い何か。

辺り一面焼け野原となり、かつてそこに文明があったことは僅かに残るビルの残骸がなければ分からないだろう。

それほどに激しく世界は破壊されていた。

この状況こそ地獄のような状況というのだろう、人体が焼け焦げる嫌な臭いが世界を満たすのも時間の問題だろう。

この破壊を齎した災厄の元凶たる存在、その名を聖王のゆりかごは軌道上から月から得られる膨大なエネルギーを使い地表を焼き払っていく。

聖王のゆりかごを止められる人間などとうの昔に死んでしまった・
・高町なのはが存命しているにはしているが戦える状態ではないし、
エースオブエースが本気で挑んで勝てない相手に管理局の一般魔導士が勝てる道理もない。

ましてや彼女は今、`動力源`としてゆりかごに捕らわれているのだ。

彼女だけではない、機動六課所属の前衛メンバーの八割がそこにいるのだ、そのエネルギー総量とレリックのエネルギー量が合わさった今ではアルカンシエルすら無効化されてしまうほどである。

唯一管理局に残った機動六課所属の前衛メンバーの廃棄都市にあるオフィス街で発見され、ティアナ・ランスターであることが判明するも重態のため活動不能、最近になって目覚めたが廃人同然の状態であり戦えるわけではない。

そして現在唯一の希望異世界からの来訪者の駆る巨人のみであるが、彼の者は一度敗北している。

それ故に大きな期待をしたりはせずに管理局を含め全ての人間はあきらめ掛けていた。

不意に現れる空間モニター。

『ふははは！！見たまえ、この下らない世界の無能どもが失意にのまれる哀れな姿を！ああ、滑稽だね！！もつと私を楽しませてくれないと壊しがいが無いだろう？つまらないだろう！？』

狂気に魅入られた無限の欲望を持つ科学者が映り狂ったようにわめき散らす。

傍らに支える女性の表情は読めないが、おそらく同様の考えなのは誰しもが分かった。

この狂気に魅入られた科学者こそが世界に名を届かせた悪名高きスカリエッティであり、この事態を作り出した張本人である。

彼が腕を振り下ろす度に数千人以上の生命が失われる。

誰もが悔しがった、だが今のスカリエッティに勝てるだけの力が無いのだ。

どうしようもない状況の前に人々の心はくじけ掛けた・・・だが人々は昔から諦めが悪いもので、最後まで絶望だけはしなかった。

死に逝く人々の姿を見るスカリエッティは人々のその姿勢が気に食わないらしくゆりかごの砲撃の範囲を拡大させ人々を蒸発させていった。

世界がズタズタになり疲弊した人々の顔から希望が失われるのにその時間はかからなかった。

誰もが絶望に身を染めようとした・・・。

だが希望の火はまだ消えていなかった。

『人の生命を弄ぶ貴様！！』

瓦礫の山から声がする。

人々はハツとし瓦礫の山に視線を送る。

スカリエッティも声のする方向に顔を向けるが、無関心のようなのだ。

『いますぐ抵抗を止める！人を苦しめて楽しいか？！人の未来を壊すのがそんなに楽しいか！？』

瓦礫の山が震える。

スカリエッティはそれに対して、面倒くさそうに片手を振り隣に支える女性に瓦礫ごと消し飛ばすよう指示を出す。

女性は素早く照準を瓦礫の山へと定め艦砲射撃を開始した。

『まだ、抵抗するというのはなら！』

瓦礫に埋もれた声の主がそう叫ぶのとほぼ同時にゆりかごの極太の砲撃が瓦礫の山を消し飛ばした。

勝利を確信するスカリエッティ、しかし人々は見ただ。

ゆりかごの砲撃の着弾地点に集まる靄のような何かを。

そして靄を吸収し、紅く輝く巨人を！！

『人の生命を弄ぶ貴様には分かるまい、この俺の身体を通して出るこの力が！！』

トリコロールの白い巨人、その名をZガンダムという。

人の生命を吸い力とする巨人がミッドチルダの空を駆け抜ける姿を見たスカリエッティは忌々しげな表情を隠そうともせず、一度舌打ちをして鑑首をZに向け主砲の発射をしようとパネルを操作しエネルギーを充填させていく。

『何故君は私の邪魔をするのかね？この下らない世界を、下らない愚民どもを何故守ろうとするのかね！？』

血走った眼を見開くその様は悪鬼のようであり、スカリエッティの彼への恨みの深さが伺える。

『いい加減飽きたのだよ、君の相手はね！私の崇高な考えを理解出来ない愚民どもと共に消え去るがいい！！』

Zが大気圏を抜け軌道上に現れる寸前にゆりかごの主砲のエネルギーがフルパワーとなりスカリエッティの手により発射された。

数発で地表を全て焼き払うことが可能な主砲がZを襲う。はつきり言って回避は出来ないだろう。

何故ならZの後に守るべき人々がいるからだ。

今度こそ勝利を確信したスカリエッティは狂ったように笑い出す。

だが、Zの力は・・・人々の生命の力はこの程度では終わらなかった。

Zが主砲着弾前に引き抜いたビームサーベルの刀身がZの全長を超え、ゆりかごと同程度になり主砲を切り裂く。

それにより本来地表に着弾するはずだった主砲の軌道がずれ、宇宙の彼方へと消え去った。

人の生命を吸い力とするZだからこそ出来る芸等である。

もしもこれが伝説の始まりであるRX-78 ガンダムであったならばどうにも出来なかっただろう。

だがZとて万能なわけではない。

途方もないエネルギーを使える代償としてパイロットの精神を蝕むのだ。

今の一撃でパイロットである少年の精神は霞み始めていた。主砲を発射したばかりのゆりかごは攻撃できないが、数分もすれば冷却が終わり再び猛攻してくるだろう。

タイムリミットが残り僅かというのは彼も分かっている。だが精神が消えかけている彼の身体は動くこつが出来なかった。

勿論糠喜びに終わり腹立たしい思いのスカリエッティは全力で次の攻撃に向け準備をしているだろう。

その証に今まで使ってこなかったガジェットを数千機投入してきている。

Ｚとガジェットでは大きさに差があり過ぎるため一瞬で機体を破壊されることはないが、少しずつダメージは蓄積される。現にいくつかのモニターはブラックアウトしている。

そしてゆりかごの冷却が終わったのだろう、主砲が再び光輝き始めた。

全ての人々が今度こそ諦め、絶望しようとしたそのとき、風が吹いた。

——諦めないで、カミィユ。諦めないで、みんな……——

風に乗って聞こえてきたちよつとした物音でも消えてしまいそうなほど小さな声であったが、確かに声がした。

そして人々は驚きの光景を目にした……。

ゆりかごの周りに幾万の白い霞の塊が集まっていき、やがて主砲を覆い尽くしていくその光景を。

神秘的な光景を目にした人々は更に驚かされた。

なんと、驚くことに霞に包まれた主砲からエネルギーチャージの光が消えていったのだ。

スカリエッティも例外ではない。

不可思議な現象が起き主砲が沈黙したとなれば無理もないだろう。彼の思考は時間にして一二分フリーズしていただろう、だが直ぐに彼は頭を振り狂った正気を取り戻し忌々しげにZを睨みながらコントロールパネルを両拳で殴りつけた。

『なぜだ！？なぜ主砲が沈黙した！？』

頭をかきむしるスカリエッティ、そのときスカリエッティは何者かの気配を感じ取り後ろを見た。

——分からないか、スカリエッティ。これこそ人の可能性であり力なのだ。——

そこにいたのは死んだはずのゼストとレジアスだった。自分の目がおかしくなったのかと思ひスカリエッティは目を擦るが二人の姿は変わらずそこにある。

——はしやぎすぎたな俺も・・・お前も・・・なあ、スカリエッティ。——

レジアスが語りかけるがスカリエッティは聞こうとしなかった。有り得ない現象と断じたからだ。

だが二人の声は耳を塞いでも・・・大声でわめき散らしても聞こえてきた。

いよいよスカリエッティは追い詰められたらしく、コントロールパネルを弄りなのは達の捕らわれた動力室の自爆用意をしスイッチを押そうとした。

だが押せなかった。

なぜならそこには・・・

——お前に勇者たちはやらせない。死した私だが今こうして再び世に見えたのだ・・・その間くらい主や主の友人は私を守る。——

10年前の冬、光となり永久に帰れぬ旅路についた祝福の風、リインフォースがスカリエッティの腕を掴んで関節を締め上げていたのだから。

苦しむスカリエッティ、だが忘れてはいけない。

スカリエッティも決して一人ではないのだ。

スカリエッティの右腕ともいうべき女性、ウーノがパネルに表示された自爆スイッチを押し込む。

リインフォースがしまったと呟くが既に遅い。

自爆装置が働き動力室は爆発し、粉々になる。

スカリエッティとウーノはクツクツと笑う。

しかしスカリエッティの思うようにはならなかった。

なぜなら動力室は確かに爆発したがなのは達は靄に守られ傷一つつけられていなかったのだ。

——子を守るのは親の勤めなのよ！——

響く声、その正体はスカリエッティのせいで死んだクイントのもの。そう、クイントがなのは達を守ったのだ。

『人の可能性を否定し破壊しか生み出さない貴様！』今まで沈黙していたZのパイロット、カミーユが復活し通信を送ってきた。

気が動転してしまいカミーユの言葉などスカリエッティに聞こえてはいないが、カミーユは続けた。

『お前はここにいちやいけないんだ、闇に還れ！スカリエッティ！』

Zが今まで以上に輝き深紅のフィールドを纏い変形しウェイブライ

ダーとなりゆりかごのスカリエッツィの居る場所に突っ込む。
堅牢なはずのゆりかごの装甲をも簡単に突破したZがスカリエッツィをフィールドで押し潰す。

だがスカリエッツィの無限の欲望が怨念となりカミーユを襲った。

スカリエッツィが死亡して数分もするとクラウドディアがやってきた。
クラウドディアから探索用の小型艇が射出された。
なのは達を回収しZも回収しようと小型艇のマニピレーターでZに接触したパイロット達はそこで悲しみに身を浸すのだった。

『……艦長、カミーユ・ビダンが……』

同時刻、病院のティアナに変化があった。

今まで意識のなかった彼女がゆっくりと身体を起こし、窓の方を向
き空を見上げ小さく呟いた。

『……カミーユ。』と。

あれから幾月もの時が流れた。

スカリエツティ死亡後、事後処理に追われる局員達が自発的に行っていたことがある。

それは・・・

「やつぱりダメだったか・・・ったく、まだ借りも返してねえってのによ。」

頭をガリガリと掻く中年。

「MIAつすからね、一応。そっぴや同じタイミングでもう一人MIAなんすよね？今回。」

気怠げに話す青年、彼らが行っていたのは

「カミーユ・ビダン、そしてティアナ・ランスター・・・彼らは一体何処に行ってしまったのだろうか・・・」

中年がため息混じりに言った。

そう、彼らが行っていたのはMIAと認定されたカミーユ・ビダン、および行方不明となってしまったティアナ・ランスターの搜索である。

彼らはスカリエツティ死亡後すぐにその行方が分からなくなってしまう、先月にはMIAと認定されている。

だが局員は誰一人として彼らの搜索を止めることはなかった。

Zとカミーユの見せた死者達を始めとする全ての者達の心をリンクさせ互いを深く理解させる不思議な光と、そして人の可能性を局員達全員が見たからなのだろう。

しかし彼らの努力も虚しく、カミューとティアナが見つかることはなかった。

とある山里に二人の男女がいた。

一人は車椅子に座り空を眺め一人はその車椅子を押し車椅子に座る者を見つめている。

無音の世界、それは長い時間変わることはなかった。

だが不意に車椅子を押している者が車椅子に座る者に話し掛けたことで静かな世界に音が生まれた。

「良かったのかしら、これで。」

まだ少女のような印象を受ける明るい声だ。

その声はどこか不安そうであったが、車椅子に座る者が答えることで多少は不安が薄らいでいた。

「良かったのかは分からない。けれど人は分かり合えたはずだ、僕にはそれが分かる・・・いや、分かってしまうのか・・・少し疲れちゃったよ、僕は。もう少し・・・もう少しだけ休ませてくれ、そうしたらまた必ずみんなのところへ行くから。」

疲れきってしまったているのだろう、車椅子に座る少年の声は弱々しいものであった。

だがどこか力強くもあった。

少女はそう、とだけいった。

「けど君まで来たのには驚いたな。君は良かったのかい？僕についできたりして。」

少年は首を動かし少女を見た。

少女は・・・笑っていた。

「大丈夫よ、みんなとはまたいつでも会えるわ。今は私も疲れてしまったの、だから・・・しばらくはお休み、ね。」

どこまでも綺麗な笑顔だった。

そして少年は少女の声を確かに聞いた・・・あの時聞いた声、スカリエッティをやった時に聞こえたものと同じ声だった。

私の想いが貴方を守るから

スカリエッティの怨念にも負けない純粹な想いに包み込まれた少年の心は少しずつ癒されていった。

だから少年は語りかけた。

必ず帰る、と。

全ての人々へ。

また合おうと。

ちゃんと届いたかは分からない、だが確かに全ての人々がその声に気づいたことだけは分かった。

少年と少女は無音の世界で静かに休む・・・。

暖かな風のような何かが二人を祝福するかのように優しく身体を包み込んだ。

二人は静かな眠りについた。

そして夢を見た。

みんなのところに帰りもみくちやにされる自分たちの姿を、泣きながらお説教してくる女性の姿を、女神のように優しく微笑む二人の女性を・・・そしていつものように明るく元気に笑う仲間達の姿を。

二人は思った。

世界はこんなにも暖かいのだ、と。

刻の涙・END

番外編其の壱 刻の涙（後書き）

はい、お疲れ様でした。
どうでしたでしょうか。

ティアナ好きなんです、個人的にティアナがヒロインの話を見ると
w k t k、k t k r 状態なんです、はい。

次回は早めに投稿したいな↑願望

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1459j/>

魔砲戦記リリカルなのはW S t r i k e r s

2010年10月11日05時27分発行